資料1

住民参画型学習事業の成果の確認と今後の展開について

〔答申案〕

令和５年８月

仙台市公民館運営審議会

目　次

はじめに 1
第１章　各事業のこれまでの成果と課題 3
１．若者社会参画型学習推進事業について 3
（１）第１期（平成 22 年度～24 年度）の成果と課題 3
（２）第２期（平成 25 年度～29 年度）の成果と課題 3
（３）第３期以降（平成 30 年度～）の成果と課題 3
（４）まとめ 4
２．住民参画・問題解決型学習推進事業について 4
（１）第１期（平成 23 年度～25 年度）の成果と課題 4
（２）第２期（平成 26 年度～29 年度）の成果と課題 4
（３）第３期（平成 30 年度～）の成果と課題 5
（４）まとめ 5
３．子ども参画型社会創造支援事業について 5
（１）第１期（平成 23 年度～25 年度）の成果と課題 5
（２）第２期（平成 26 年度～29 年度）の成果と課題 6
（３）第３期（平成 30 年度～）の成果と課題 6
（４）まとめ 6
第２章　各事業の現状に関する評価 8
１．若者社会参画型学習推進事業について 8
（１）各事業の概要と審議会での意見 8
（２）当該事業に対する評価 11
２．住民参画・問題解決型学習推進事業について 11
（１）各事業の概要と審議会での意見 11
（２）当該事業に対する評価 15
３．子ども参画型社会創造支援事業について 15
（１）各事業の概要と審議会での意見 15
（２）当該事業に対する評価 17
第３章　今後の展開について 19
１．「住民参画型の学び」 20
２．「世代間交流」 21
３．「地域資源」 22
４．「持続可能性・つなぐ役割」 23
５．「情報（成果物）発信」 24
６．「アフターコロナ」 25
おわりに 28

資料編

1　諮問書

○諮問書…… 32

2　関連資料

○仙台市市民センターの施設理念と運営方針…… 34

○住民参画型学習事業の経緯…… 43

○市民センター事業説明書（若者社会参画型学習推進事業）…… 47

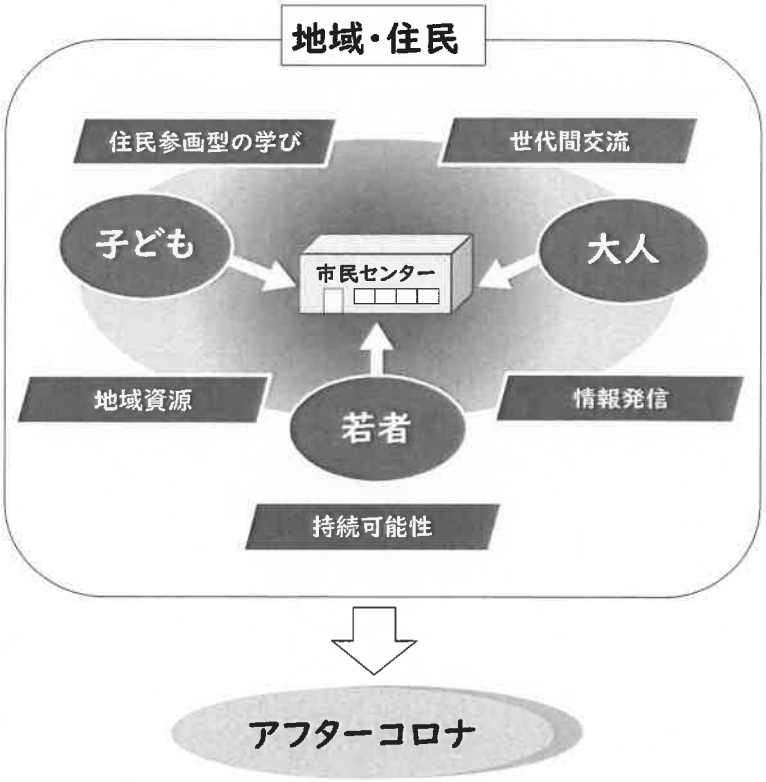
○市民センター事業説明書（住民参画・問題解決型学習推進事業）…… 52

○市民センター事業説明書（子ども参画型社会創造支援事業）…… 58

3　参考資料

○仙台市公民館運営審議会委員名簿…… 62

○仙台市公民館運営審議会審議経過…… 63



はじめに

仙台市市民センターでは、市民自らが地域課題に向き合い、住み良いまちづくりにともに取り組むことができるよう、地域の身近な社会教育施設として、多様な学習の機会を創出するとともに、市民の主体的な学びへの支援と、学びを通した人づくりに取り組んでいる。中でも、市民センターを拠点とする住民参画型の学習事業については、若者対象の「若者社会参画型学習推進事業」には平成22年度から、大人対象の「住民参画・問題解決型学習推進事業」、子ども対象の「子ども参画型社会創造支援事業」には平成23年度から取り組んでおり、各世代の市民の主体的な活動の促進に努めながら、各地域で多様な実践を続けている。

この間、東日本大震災の被災と復興、少子高齢化やデジタル化の著しい進展、国連による持続可能な開発目標SDGsの設定、新型コロナウイルス感染症の流行など、生涯学習と地域コミュニティを取り巻く環境は大きく変化しており、地域社会からの要請や期待に応え、様々な世代の市民が持続可能なコミュニティづくりに参加することの重要性はますます高まっている。

今期の仙台市公民館運営審議会では、令和３年11月に、仙台市生涯学習支援センター長より住民参画型学習事業の成果と今後の展開について諮問を受け、同事業が地域やまちづくりにどのような成果をもたらしてきたかを確認するとともに、市民センターが地域づくりに向けた学びを推進していくための今後の事業の展開について、２年間にわたる議論を重ねてきた。本答申が、市民センターが地域づくりをけん引する人づくりをより積極的、効果的に進めていくための一助となることを期待したい。

公民館運営審議会の審議の経過は以下のとおりである。

○令和４年３月の会議で、事務局より「住民参画型事業の概要」及び「子ども参画型社会創造支援事業の成果と課題」について説明があった後、太白区中央市民センターより「ぼくらの長町黄援隊！」の事例発表があった。これを受け、社会教育主事がファシリテーターとなり、委員が３つのグループに分かれ議論を行い、その概要をそれぞれのグループから発表した。以後、同様のスタイルで審議を進めてきた。

○令和４年５月の会議では、事務局より「住民参画・問題解決型学習推進事業の成果と課題」について説明があった後、高砂市民センター及び宮城野区中央市民センターより「中野ふるさと学校」、桂市民センター及び泉区中央市民センターより「かつら情報局」について、それぞれ事例発表があり、これを受け３つのグループに分かれて議論を行った。

○令和４年７月の会議では、事務局より「若者社会参画型学習推進事業の成果と課題」について説明があった後、青葉区中央市民センターより「若者によるまちづくり実践塾」、若林区中央市民センターより「仙白園プロジェクト・人」について、それぞれ事例発表があり、これを受け３つのグループに分かれて議論を行った。

○令和４年９月から 10 月にかけて現地視察を行うこととし、住民参画・問題解決型学習推進事業と

して根白石市民センター「市民企画会議かむりの里いきいきプロジェクト」、子ども参画型社会創造支援事業として中山市民センター「中山キッズ」、若者社会参画型学習推進事業として宮城野区中央市民センター「まいぷろ（Miyagino Young PROgram)」の３事業を視察した。

○令和４年 11 月の会議では、事務局より事業視察の実施概要について説明があった後、視察をした事業ごとのグループに分かれ、事業の成果と課題、今後期待することなどについて議論を行った。

○令和５年１月の会議では、これまでの議論を振り返りながら答申の内容構成について３つのグループに分かれ議論を行った。

○令和５年３月の会議では、事務局より骨子案が示された後、中間案の作成に向けた分担について協議した。続いて、答申の「今後の展開について」の担当委員を座長とする小グループに分かれ、答申の中に盛り込むべき内容について議論を行った。

○令和５年５月の会議では、事務局より中間案が示された後、３月の会議と同様、答申の「今後の展開について」の担当委員を座長とする小グループに分かれ、答申の中に盛り込むべき内容について議論を行った。

○令和５年７月の会議では、事務局より答申案が示された後、章ごとに議論を行った。

グループでの議論の様子

第１章　各事業のこれまでの成果と課題

本章では、令和４年３月から７月に開催された審議会における、住民参画型の学習事業３事業の成果の確認の際に示された資料に基づき、各事業の概要と令和３年度までの成果と課題について記述する。

１．若者社会参画型学習推進事業について

若者社会参画型学習推進事業は、若者の地域づくりへの参加や、様々な人々との学び合いを通して、身近な地域をより良くすることへの意識を高め、自発的・主体的に行動しようとする人づくりを推進することを目的に、通称「若者事業」として平成 22 年度より取り組んできた事業である。

（１）第１期（平成 22 年度～24 年度）の成果と課題

第１期では「若者によるまちづくり実践塾」という事業名で実施した。各区で若者の自己肯定感を高めながら地域への関わりを促す事業を企画・実施し、若者の地域づくりへの関心を一定程度高めることができた。一方、若者の自発的・主体的な行動を十分に引き出すまでには至らなかった。

（２）第２期（平成 25 年度～29 年度）の成果と課題

第２期では「若者社会参画型学習推進事業」と事業名を変更して実施した。前年度の受講者が講師役となり新たな受講者にスキルを伝える姿も見られ、事業の継続実施が人材育成の循環につながった。事業を通して、地域の方々や関係者との対話を通し、受講者のコミュニケーション力や調整力を向上させることができた。また、成果物作成の過程では表現力や発信力、交渉力、企画力の向上も図ることができた。さらに、受講者に自主企画、自主活動という意識が生まれ、自己有用感の向上や意欲的に参加するようになるなどの変容が見られた。一方、受講者が学生の場合、学業やアルバイト、就職活動などにより、長期的、継続的な参加が困難な面があった。

（３）第３期以降（平成 30 年度～）の成果と課題

第３期では、事業の実態に応じながら事業参加者の世代間交流を図り、加えて高校生や専門学校生、社会人への事業広報も進めた。参加者が地域住民と交流を図りながら、地域を歩いたり活動したりすることで、地域への関心が高まり、自発的な行動につながるとともに、コミュニケーション力や傾聴力、実行力を発揮することができた。一方、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、各事業の参加者が交流し、互いの取り組みを学び合う機会を持てない時期もあった。令和３年度からは、複数年度にまたがる期を設けずに実施し、参加者が、地域で活動してみたいという意欲の喚起や自分自身の成長を実感できるよう、主体的に

学習ニーズや地域の資源・現代的な課題等に関わる学習プログラムを設定し様々な取り組みを行った。学びのプロセスを大切にする中で、地域の課題等の解決に取り組もうとする意識を高め、地域・社会の構成員として、主体的・意欲的に活動できるような人材が育成された。

（4）まとめ

これまでの「若者社会参画型学習推進事業」では、主体的に学習ニーズや地域の資源・現代的な課題等に関わる学習プログラムを設定し、学びのプロセスを重要視した取り組みを行った。その結果、若者の地域課題等の解決に取り組もうとする意識が高まり、地域・社会の構成員として、主体的・意欲的に活動できるような人材が育成された。

一方、参加者が学生中心であるため、長期的、継続的に参加することが困難な場合も多く、参加者の確保が課題である。

2．住民参画・問題解決型学習推進事業について

各区中央市民センターのコーディネートのもと、住民と市民センターの協働により地域課題を発見し、課題解決への取り組みを学び、実践する事業である。通称「大人事業」として平成23年度から実施しており、地区市民センターとも共催しながら事業を展開している。

（1）第1期（平成23年度～25年度）の成果と課題

第1期では、多くの区中央市民センターが地区市民センターと共催しながら、地域に根ざした事業を実施した。新たな地域人材が発掘され、様々な社会教育的働きかけにより主体的な活動が生まれた。一方で、市民主体のまちづくりを目指し、効果的に進めていくためには市民協働について市民へのさらなる啓発や、地域課題を発掘するプロセスには工夫が必要であった。また、地区市民センターにおける取り組みを広げるための手立てを講じていく必要性や事業の枠内での取り組みから自主的な活動への橋渡しには難しさが残った。

（2）第2期（平成26年度～29年度）の成果と課題

第2期では、受講者が段階を追って主体的に事業に関わるようになり、参画の度合いが高まってきた。「集い・交わる」「考え・深める」「創り・広げる」「再考し・活かす」といった参画の段階を踏んだ事業を実施した。年数を重ねるごとに受講者の自信、自己肯定感、自己有用感が向上した。成果物が、地域課題解決や地域資源活用に役立った。また、ジュニアリーダーや子ども会などとの世代を越えた関わりが増えはじめ、自主サークル化して活動を継続する団体も出てきた。市民センターの役割の視点から見ると、区中央市民センターと地区市民センターとの共催から地区市民センター主導による事業実施館が増加した。併せて、事業を支援する市民センター職員のコーディネート力の向上が見られた。一方で、既存の事業

を見直したり、再構築したりすることで住民参画型事業として実施可能な事業があり、さらなる波及効果（より広い地域、人材、世代等との交流）を見据えた取り組みが必要である。

（3）第3期（平成30年度～）の成果と課題

第3期は、地区市民センターを拠点として自主サークル化して活動を継続する団体や、新たに地域課題を発見し、解決に向けて取り組む団体もあり、これまで培った事業参画者の学びの成果が地域で生かされている。市民センター職員が、地域課題解決のためのプロセスや目的に迫るアプローチの手法を事業参加者である地域住民とともに検討しながら事業を進めることで、住民が主体的に考えながら活動し、自己有用感や課題解決に取り組む意欲の向上につながっている。さらには、取り組みにより得られた成果・手法などを、成果報告会などで共有することができた。一方、回数を重ねるにつれ、地域交流の場として地域密着型の事業となっているが、メンバーの高齢化が課題となっている事業もあり、新規メンバーの加入促進が不可欠である。

（4）まとめ

これまでの「住民参画・問題解決型学習推進事業」では、地区市民センターが中心となって、それぞれの地域に根ざした事業を実施してきた。事業を通して、新たな地域人材が発掘され、様々な社会教育的働きかけにより主体的な活動が生まれた。また、年数を重ねるごとに受講者の自信、自己肯定感、自己有用感が向上した。一方、回数を重ねるにつれ、メンバーの固定化・高齢化が課題となっているため、新規メンバーの加入促進が重要である。

3．子ども参画型社会創造支援事業について

小学生の児童から中学校・高等学校の生徒まで、子どもたちがそれぞれに地域社会の構成員としての意識を育みながら成長していくことを目指し、子どもたち自身が主体的に参画し、子どもならではの役割と可能性を自由に発揮できる事業である。通称「子ども事業」として平成23年度から実施しており、各区中央市民センターを中心に、地区市民センターとも共催しながら事業展開を図っている。

（1）第1期（平成23年度～25年度）の成果と課題

子どもたちが、地域の中で役割を持ち社会の構成員として積極的にまちづくりに参加し、自分たちの地域の課題に気づき、社会・地域の一員として行動する視点を持つことで、将来的に社会や地域で主体的に活躍できる人づくりを目指した事業を、各区中央市民センターにおいて実施した。

事業を通して、子どもたちがまちづくりに関わり、自己有用感や達成感を味わい、活動意

欲が高まった。事業に関わった大人同士のネットワークも構築することもできた。また、区ごとに事業を実施したことで、多様なアプローチがあることが明らかになった。一方で、地区市民センターとの関係、「自分づくり」と「地域づくり」との関係等、目指すべき方向性について、各区間での共通理解がなされなかった。また、子どもを対象とした事業のため、連絡、交通手段を確保することが難しかった。

（2）第2期（平成26年度～29年度）の成果と課題

各区中央市民センターを中心に本事業を実施してきたことを踏まえ、取り組みを拡大するため事業ノウハウを地区市民センターに伝えるとともに、「住民参画・問題解決型学習推進事業」「若者社会参画型学習推進事業」との連携も視野に入れて実施した。事業に参加した児童生徒は、活動交流会や成果報告会などを通じて互いの活動について知り、これまでの活動を振り返ることで、達成感や充実感を味わい今後の活動の意欲が高まった。また、子どもたちが自分たちにできることを考え、地域社会の協力を得ながら活動することで、自らが地域で役立つ存在であることへの「気づき」が生まれた。さらに、市民センターや各学校へのリーフレット配布により、事業への関心を高めることができた。

（3）第3期（平成30年度～）の成果と課題

子どもたちの「社会に参画していく力」、「社会に発信していく力」をさらに育むとともに、地域・家庭・学校や関係機関等と連携し、子どもたちが地域の方々と協働して活動できる環境をつくることをねらいとして実施した。

事業に参加した子どもたちは、自分たちにできることを考え、地域社会の協力も得ながら活動することで、地域への関心を高めるとともに、「地域の一員」としての自覚を持つことができた。また、子どもたちは、取り組みを通して地域住民と交流する中で、達成感や充実感を味わい、今後の活動意欲が高まった。

一方、多様な人々や団体とのつながりの形成が求められている。一定の学校や地域にとどまらず、さらに多くの子どもたちと地域を、市民センターが核となって巻き込んでいくことが必要である。今後は、市民センターが相互に連携し、他の地域や事業の関係者同士が交流できる場を提供することで、子どもたちの活動をさらに飛躍させることを期待したい。さらに、事業で得た成果を他の地域や事業にも広げ生かしていくことで、市民活動を支えるネットワークの拠点として地域づくりやまちの活性化に貢献することができ、持続可能な取り組みとすることができる。

（4）まとめ

これまでの「子ども参画型社会創造事業」では、子どもがまちづくりに関わり、自己有用感や達成感を味わうことで、活動への意欲の高まりがみられた。また、参加者が地域への関

心を高めるとともに、「地域の一員」としての自覚を持つことができた。一方、多様な人々や団体とつながりを構築していくことが求められている。市民センターが核となって、さらに多くの子どもたちと地域を巻き込んでいくことが重要である。

グループでの議論の様子

第２章　各事業の現状に関する評価

本章では、令和４年３月から７月に開催された審議会における、住民参画型学習事業の成果の確認の際になされた各事業の説明及び、令和４年９月、10 月に実施した各事業の現地視察に基づき、各事業及び視察の概要とそれらに対する審議会としての意見について記述する。

１．若者社会参画型学習推進事業について

（１）各事業の概要と審議会での意見

①「若者によるまちづくり実践塾」（青葉区中央市民センター）

【事業概要】

平成 25 年度から青葉区中央市民センターにおいて「青葉区まちづくり実践塾」として実施している。若者自身が地域課題を見つけ、その調査・整理・分析を行い、自分たちの取り組みを発信することで、「若者がまちづくりに関わっていく」という事業のねらいを達成できるように取り組んでいる。令和３年度は、テーマを「若者視点による青葉区の魅力発信」として、フィールドワークや奥州街道マップの作成等を行った。マップや動画の制作にも主体的に取り組むなど、事業担当者の支援の下、ほぼ若者主導による形で実施した。

【審議会での意見】

・活動内容の自由度が高いということ、若者主体で何をしたいか考えること。それらが主体性につながっている。
・コロナ禍の中でも多くのことができているということが素晴らしい。
・参加者が他の活動者と交流することによって気づき、成長が見られた。若者らしい視点での活動がなされている。パンフレットの質がとてもいい。
・若者主体で制作したマップをどのように活用していったらいいのか。
・マップを都市計画学とか地理学などを学んでいる学生に持ち込んで、PR も含めて活用すれば良いのではないか。制作した動画をどんどん YouTube 等にアップして積極的に情報発信すれば良いのではないか。現在の市民センターはなかなか若者が自主的に足を運んでくれる場所にはなっていないというところで、様々な仕掛けをして若者が足を運びたくなるような市民センターをつくっていくと良い。

②「仙白園プロジェクト・人」（若林区中央市民センター）

【事業概要】

平成 23 年度に前身事業の「仙台白菜復興プロジェクト」を開始、平成 25 年度から「仙白園プロジェクト・人」として実施している。仙台白菜という地域資源を生かし、子ども事業参加者やジュニアリーダーも巻き込んで活動している。令和３年度は、若林区の魅力や良さ、課題を調べることから活動を始め、ビーチクリーンや地域清掃、サイダー販売等を行った。

【審議会での意見】

・様々な地域貢献活動が行われているということで、地域の人から感謝をされるということが若者にとって自己有用感の向上につながり、それが活動のモチベーションにつながっていた。

・チャボ！、ジュニアリーダー、若者ということでうまく市民センターに人がずっと居つくというか流れていく良さがあるのではないか、幅広い参加者があってとても良い。被災地域というところもあり、その思いの強さが表れているのではないか。

・子ども事業、そしてジュニアリーダーも入って、さらには若者事業にもつながるという流れが地域の中で、この市民センター事業の中であって、その中で地元愛、地域を大切にする思いが育まれているというのが良かった。

・白菜のほかにもっと、伝統野菜についてさらに深めることもできるのではないか。現実的には難しいかもしれないが、実際にそれを何らかの形で販売とか、そういうことができるのであれば、さらに若者たちも本気になれる可能性があるのではないか。そこはハードルが高いかもしれないが、何らかの実行委員会形式とかということで可能性がある。

・若者がやっていることに対して周りの大人たちが実際に褒める、評価するということが、これからの若者事業をやっている人たちの意欲向上にもつながる。

・参加者の確保が話題になった。大学生はとても忙しいし、経済的にアルバイトが必要な子もいる。そういう若者を活用していく、来てもらうということを考えていかなければいけない。一つの提案として、大学生の参加を大学の単位の一環として認定してもらうことができれば。市民センターの地域活動とか地元の地域を考えるとかというのを大学の単位とうまくコラボしていけると、忙しい大学生がこちらに向くのではないか。すべての活動がとても素晴らしいのだが、今の大学生はわりと具体的な例を示さないとなかなか参加しにくいのではないか。例えばこういう活動をします、こういう活動をするのでこうしたいですという具体的な例があれば参加するのだが、やりたいことみんなでやってみませんかとか、ふわっとするとなかなか参加がしにくいので、それらに気をつけながらアピールをすれば良いのではないか。

③「まいぷろ（Miyagino Young PROgram)」（宮城野区中央市民センター）

【事業概要】

宮城野区の「沿岸部」や「仙台駅東エリア」等、区内にある地域の魅力を取材し、Web 記事または動画の制作・発表を通じて、様々な人々と協働し、身近な地域をより良くすることへの関心を高めるとともに、社会・地域の一員として、自発的・主体的に行動できる人づくりを行うことをねらいとして実施している。令和４年度は高校生 14 名が参加した。

【視察概要】

・実施日時　令和４年10月22日（土）14：00～16：00

・実施場所　仙台市宮城野区中央市民センター

・活動内容　編集会議

・事業参加者数　11名（企画員11名）

・視察委員　市瀬智紀委員、幾世橋広子委員、佐藤正実委員

【審議会での意見】

・子どもたちの目指したコミュニケーション能力は身についていた。

・地域の人たちや団体と協働して活動というところがねらいであり、市民活動サポートセンターやTOHOKU360、宮城野区内のたくさんのお店や施設とも協働ができていた。

・たくさんのことを調べて、たくさんのことを考えて、記事を作成中だが、リーフレットにするだけではもったいない。紙面に入らないのではということで、冊子にしてみるのも良い。今回はWeb記事にして発信をする予定であり、それも良い。

・事業として継続していくと、子どもたちは入れ替わっても何年か分の記事はたまっていって、例えば歴史であるとか子育てなどとカテゴライズされた、宮城野区のカテゴリー別の記事集みたいなものができていくので、継続していくのも良いのではないかと。その中で、もしかしたら今回なかった新しいカテゴライズができていくと良い。

・市民センターの持っている情報網とか人脈をとても有効に活用した事業だった。サポセンとかTOHOKU360というのは学校だけではつながることができない団体なので、そういう意味では市民センターが入ることの意味が大いにある。

・大人が行くとなかなかにこやかに対応してもらえない場所も、高校生が行くととても丁寧に対応してもらったり、温かく受け入れてもらえた。高校生が地元に受け入れてもらうことで、今度は自分たちが頼れる存在になっていける。自分たちがもらった安心感を人に与えていけるようになると良い。

・実は地域に若者とつながりたい、子どもとつながりたいと思っている人たちがいる。そういう人たちともうまく連携をとっていけたら良い。

まいぷろ（Miyagino Young PROgram）」（宮城野区中央市民センター）　視察の様子

（2）当該事業に対する評価

「若者によるまちづくり実践塾」では、活動の自由度が高く、何をするかを考えることを通して参加者の自主性が高まっていた。質の高い成果物を作っており、その活用が課題である。「仙白園プロジェクト・人」では、世代を越えて事業が展開されている中で、地域貢献活動を通して参加者の自己有用感が高まっていた。効果的に取り組みを発信し、参加者を確保することが課題である。「まいぷろ（Miyagino Young PROgram)」では、市民センターが持つネットワークを活用して、コミュニケーション能力など参加者が身に付けたい力を育成することができていた。蓄積してきたWeb記事のアーカイブ化など、成果物の活用が期待される。総じて「若者社会参画型学習推進事業」では、参加者の主体性を引き出し、自己肯定感や自己有用感を高める取り組みが展開されていた。事業のプロセスや成果物を活用し社会に発信していくことで、さらなる事業の発展が見込まれる。

2．住民参画・問題解決型学習推進事業について

（1）各事業の概要と審議会での意見

①「中野ふるさと学校」（高砂市民センター・宮城野区中央市民センター）

【事業概要】

・本事業は、平成27年に高砂市民センターと宮城野区中央市民センターの共催事業（住民参画・問題解決型学習推進事業）として開始した。当初は被災した地域住民の心の復興を中心テーマに据え、地域住民の交流による地域の活性化を目指した取り組みを進めてきた。日和山登山やダーツ交流会などは、継続して実施されており、地域住民に広く認知されるようになった。

・市民企画員が学びを通して活動していく中で、様々な分野への興味が広がり、企画員の意欲が高まっている。近年、干潟の環境保全に企画員の関心が集まっており、令和３年度は日和山周辺の清掃活動の実施につながった。

・これまでは、震災を乗り越えるために、地域住民の心の復興を目指して事業を展開してきた。震災から10年を経て、講座のテーマを「震災からの復興」から「未来につなげる地域交流」に移行しながら、創意工夫を凝らした事業運営をする必要がある。

・令和４年度で、８年目を迎える。蒲生干潟・日和山周辺の環境保全活動を企画し、活動への参加者を公募することで交流を深めている。

【審議会での意見】

・区中央市民センターの共催を離れて、地区市民センターおよびサークルの皆さんの自走型となっている。

・日和山登山の登頂証明書がとてもいい。清掃活動は、今話題のSDGsにもつながってお

り、よい視点である。地域のためにいろいろなことをやっており、地道な活動が実を結んだ結果、表彰やメディアに取り上げられるような活動になっている。

・住民の方が自ら発信されている点、地域のいろいろな思いを次世代につなげるという点がとてもいい。復興からのスタート、その思いが、地域のつながりをなくさない、未来につながる交流ができている。

・市民センターが地域の思いを具体化している。単純に引っ張っていくということではなくて支えていく、地域の皆さんの思いを言葉や形にしていく市民センターの働きがとても良かった。

・例えばゴミ拾いを、定期的な開催にしてはどうか。深沼で定期的に活動を行っている。その中で、近くの石碑を見つけたりするなど、また新たな視点が出てくる可能性もある。

・もし可能であれば、SNS の活用というのが今後考えられる。ネットワークが拡大できると考える。講師を外部から呼ぶよりも、その地域の方々が、お互いに講師になって教え合うということも良いのではないか。

②「かつら情報局」（桂市民センター・泉区中央市民センター）

【事業概要】

・桂市民センターでは、平成 30 年度実施の主催講座「かつら情報局」を機に地域を巻き込んでの取り組みを開始し、企画委員会（令和３年度は 10 人）での話し合いと様々な講座の実施を通して、地域における人々や団体のつながりを促進している。

・令和元年度は小学生親子・中学生を対象にプログラミング講座を開催。地域の諸団体が企画運営し、地域在住の大学生、青年会議所メンバー、中学校教諭がサポートした。

・令和２年度は、平成 16 年頃に作られた「桂音頭」のアーカイブ化、さらには、令和版の桂音頭が制作され DVD 化された。

・令和３年度は「住民参画・問題解決型学習推進事業」として実施し、桂小学校運動会で子どもたちによる「かつら音頭の踊り披露」など、地域住民の絆づくりの一助となった。また、連合町内会主体で情報発信システムの「結ネット」を利用した「桂デジタルコミュニティ」の試行が始まったほか、高齢者を対象に「ゼロから始める LINE 講座」を開催した。企画委員も講師の補助を務めた。

・泉区中央市民センターでは、桂市民センター事業の支援、事業成果の情報発信を行うとともに、区内市民センター事業担当者に対し市民協働による地域づくりについて理解を深めるための説明会を開催している。

【審議会での意見】

・今後も可能性が広がる事業。最終的には、結ネットを災害時の安否確認のような仕組みとしても使えるのではという意見もあった。また、親子で参加するところが地域の顔が

見える関係づくりとしてとても良い。

・一方、高齢の方が単身でも参加できるような仕組みづくりも必要である。

・地域でちょっと気になる、やってみたい、できたらいいなを、見事に具現化している。

・ドローンやゲームなど、子どもだけではなく、親の参加によって、住民の皆さんの心理的ハードルを下げることが持続可能な取り組みになっていくと期待される。

・LINEによるトラブルが起きてくる可能性がある。ネットマナーについての講座の実施や、希望者ができるだけ受講できるよう、回数や定員を検討していく必要がある。

・顔を合わせて回していた回覧板の時代から、デジタルで回覧板が回っていくという世の流れに驚いた。デジタル化により、今まで町内会を敬遠してきた世代も参加しやすくなるのではないか。現役世代、元気な世代の人たちが、地域をつくっていけたらいい。

・特定の今一生懸命やられている人がいなくなったときに、これがどうなっていくのかという課題もある。また、情報の管理をどうしていくのか検討する必要がある。

・今の小学生は GIGA スクール構想でいろいろやっているが、その上の保護者世代の人達はプログラミングなどを学習していないので、世代によって内容を変えていく必要性があるのではないか。

③「市民企画会議かむりの里いきいきプロジェクト」（根白石市民センター・泉区中央市民センター）

【事業概要】

・泉西部地区は、歴史と伝統、自然や食文化等あらゆる魅力に恵まれた地域であるが、都市化と高齢化の進行により、それらを次の世代に残し伝えることが困難になりつつある。また、地域をけん引してきた人々の高齢化も顕著であり、若い世代の活躍と継承、地域の世代交代が期待されている。

・根白石市民センターでは、若い世代の企画員を選定し、地域の現状や未来について若い感性で話し合う場を提供するとともに、無理なく参加でき、地域内で活躍できるような事業を企画立案している。

・泉区中央市民センターでは、根白石市民センターと連携し、地域特性に応じた市民協働による地域づくりを推進している。

・令和４年度の企画員は地域住民 16 人が登録し 12 人前後で運営、うち新規参加者４人。地域課題やニーズ共有のための話し合い、地域活性化を目指した事業の企画会議、企画会議で決定した事業の実施に向けた会議を行っている。

【視察概要】

・実施日時　　令和４年９月18日（日）10：00～12：30

・実施場所　　見松寺（泉区西田中字朴ノ木山４）
・イベント名　「お寺で禅クラフト～心と器と箸をつくる～」
・事業参加者数　43 名（うち一般参加者 35 名、企画員８名）
・視察委員　　伊藤美由紀委員、大内幸子委員、牧靖子委員

【審議会での意見】

・一番初めの目的の共有のときに、住職の方が、「この機会を通して家族での会話が弾んでほしい」と話をした。それがとても良かった。いきなり「地域づくりをしよう」では、楽しくない。その初めの言葉で、参加した大人の方々に対して、「これは遊び。みんなで楽しんでいこう」という空気をつくることができたのが一番よかった。
・竹細工は、ナタで竹を割る。自分の子どもがナタで割ろうとしているときに、「じゃ俺やってやるか」とお父さんが割ったりすると、「お父さんすごい」と一気に英雄になる。それが家族関係をしっかりつくっていく。
・家族関係をつくることがメインではなく、地域交流をつくりたい。それを今まで複数年積み重ねているこの会議で企画員が共有しているので、端端で、友達とやったら楽しいよね、地域でやったら楽しいよね、と声がけがある。一番初めのイントロダクションは、スモールステップだが、徐々にそのステップが上がっていく。その過程がとてもよかった。
・市民センターがニュートラルな立場になって、途中途中で方向修正をしていく。企画員の中にも市民センターが入っているので、目的がずれないで進んでいる。
・区中央から予算面のサポートなどがあり、会議や行事が充実している。
・企画員は、活動していくことで充実感が上がっていて、10 月 22 日には、「コメフェス」という根白石のお米のフェスティバルを自分たちで実施した。それが大盛況だった。
・大人事業としては今年度で終わりになるが、たぶん来年は自分たちでまた進んでいく。市民センターも、そこからもサポートはしていくので、どんどん地域づくりが広がっていく。とてもいい流れのベストケースだと思われる。
・一方課題として、このまま継続すると「自分たちの地域づくり」という目的から、「来る人たちのアテンドや来場者を楽しませること」という目的に意識がシフトしてしまうのではないかということが挙げられる。若い企画員の方々が、月に何度も話し合いを重ねることで、目的意識の共有がなされ、課題は解決していくのではないか。市民センターの方向修正も入りながら、これからもさらに発展していく事業であってほしい。

「かむりの里いきいきプロジェクト」（根白石市民センター・泉区中央市民センター）
視察の様子

（2）当該事業に対する評価

「中野ふるさと学校」では、市民センターが活動を上手に支え、地域住民の思いを具現化することができていた。震災から 10 年を経て、講座のテーマを「震災からの復興」から「未来につなげる地域交流」に移行しながら、創意工夫を凝らした事業運営が今後期待される。「かつら情報局」では、親子で参加する工夫が見られるなど、地域住民の顔の見える関係づくりに役立っていた。また、結ネットを災害時の安否確認のような仕組みとしても使える可能性があるなど、今後の展開に期待が持てる事業であった。「かむりの里いきいきプロジェクト」では、市民センターが途中で方向修正をしながら、事業の目的がずれないように進められていた。また、企画員の充実感が上がり、「コメフェス」という自主企画につながるなど、良い流れの中で事業を進めることができていた。

総じて「住民参画・問題解決型学習推進事業」の成果は、市民センターによる支援をもとに、参加者の自分たちの地域全体を盛り上げたいという思いを育てることができたことである。一方、参加者の高齢化などに伴う事業の持続可能性や、活動に関する情報を地域住民やその他、興味のある方々にいかにして届けるのかが課題となっている。

3．子ども参画型社会創造支援事業について

（1）各事業の概要と審議会での意見

①「ぼくらの長町黄援隊！」（太白区中央市民センター）

【事業概要】

・令和３年度よりスタートした「ぼくらの長町黄援隊！」は、主に長町エリアの小学校６校から参加児童を募集し、仙台 89ERS と協力して、地元長町と仙台 89ERS を元気に盛り上げる活動を行う事業内容である。令和３年度は試合観戦に来た観客に長町と仙台

89ERS を応援するメッセージをフラッグに書いてもらったり、仙台 89ERS のスタッフの一員として笑顔で会場を盛り上げたりした。

【審議会での意見】

・地域資源としての仙台 89ERS を通して、まず多くの人たちに事業を知ってもらい、活動を一緒にすることで子どもたちが普段できないような活動をすることができる。そこから、子どもたちの目線や視野がどんどん広がっていく。
・地域の強みを生かしたプロスポーツとの連携が良い。また、地域企業との連携も非常に良い。初めて地域のために何かをする入り口として非常に身近でわかりやすい。
・参加者を増やしていくためには、参加者を集める段階から各小学校と連携してより関心を持ってもらうことが必要。事業の周知・広報の仕方を工夫できると良い。
・子どもたちにとって、自分が住む地域に好きなものができるということは、とても大切だと思う。地域の良さ、仙台の良さといったものに気づいていくという今回のようなプロジェクトが、複数たくさんできると良い。
・プロスポーツという地域の魅力の中でも比較的新しいものをテーマにしたが、加えてその地域にしかない歴史的なもの等をかけ合わせていけると良い。

②「中山キッズ」（中山市民センター・青葉区中央市民センター）

【事業概要】

・中山市民センターで実施していた「中山キッズ」と、青葉区中央市民センターで実施していた「青陵インパクト」を融合・発展させた事業として、令和４年度より「子ども参画型社会創造支援事業」としての「中山キッズ」を実施している。仙台青陵中等学校の中学生・高校生が「小学生が地域での活動に目を向け、将来主体的に地域で活躍できる人材に育つこと」を目指して行っている事業である。令和４年度は、小学生向け講座「キンボールで遊ぼう」「ペーパーアートを楽しもう」を企画運営したり、青葉区民まつりのブースの運営にも携わったりした。

【視察概要】

・実施日時　令和４年10月９日（日）10：00～11：30
・実施場所　中山市民センター
・イベント名　ペーパーアートを楽しもう
・事業参加者数　15名（うち一般参加者９名、企画員６名）
・視察委員　相澤雅子委員、熊谷敬子委員、菅原正和委員、鈴木京子委員、
　　松田道雄委員、三浦和美委員

【審議会での意見】

・少子高齢化社会の中で次世代の人材育成という目的はとても良い。また、市民センターと近くの学校との連携がとれていることも良い。活動をしている学校が中高一貫教育を行っているので、６年を通してゆとりのある進め方をしている。６年間同じことを共有できることが仙台青陵中等教育学校としてのメリットであろう。

・イベントに参加している小さい子どもたちが企画員の姿を見て、あこがれを抱いたり仙台青陵中等教育学校への興味を持ったりする様子が見られた。人と人がいろいろ関わることで、学びが互いに深まっていったというのがとても良かった。

・イベントを失敗なくきちんと終わるというのは計画性やいろいろな配慮が必要である。また、臨機応変に動くことも要求される。そういったことを高校生がきちんとできている。市民センターのサポートとして、企画員の子どもたちのアイディアをよりよく実現するためのアドバイスや臨機応変に動く工夫などいろいろな配慮をしていることで連携がうまくいっていると感じた。

・今回は仙台青陵中等教育学校の生徒が中心であったが、地域の他の学校とやってみることができたら良い。ただ、地域の普通の中学校だと時間が３年間なので忙しい中でどこまでできるかという問題がある。

・今回は親子対象でやったが、対象を高齢の方々まで広げられると、地域との関わりが広がって良いのではないか。低学年向けの手作業であれば高齢者も子どもと一緒に参加したいと思う人もいるだろう。市民センターからそういった声がけがあってもよい。また、市民センターまつりなどでもやれると活動の幅が広がると思う。

「中山キッズ」（中山市民センター・青葉区中央市民センター）視察の様子

（２）当該事業に対する評価

「ぼくらの長町黄援隊！」は、地域の強みを生かしたプロスポーツとの連携がよく、初めて地域のために何かをする入り口として非常にわかりやすい。今後参加者を増やしていくために地域の各小学校との連携を意識するとよい。「中山キッズ」では、人と人とが関

わる中で互いに学びが深まっていた。高校生世代への市民センターのサポートとして、いろいろな配慮が見られた。今後は地域の他中学との連携や参加者の世代間交流を含んだ内容まで広げられると良い。総じて「子ども参画型社会創造支援事業」の成果は、地域資源の活用と企画運営を通しての企画員の学びや成長である。一方、企画員としての参加者の広がりや世代間交流を意識した企画立案などが課題である。

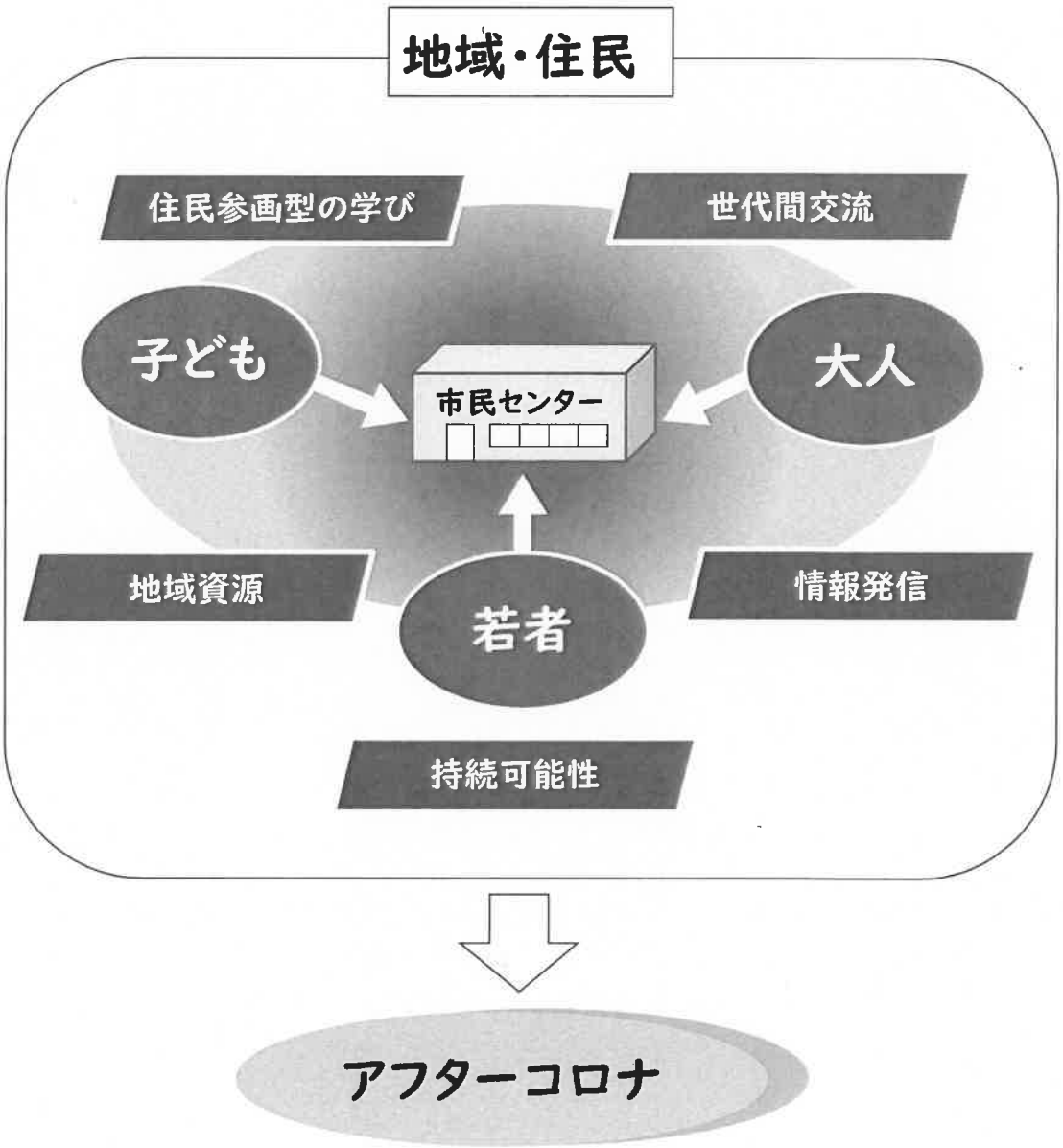
グループでの議論の様子

第３章　今後の展開について

本章では、住民参画型学習事業に関し、審議会において行われた、各事業の成果の確認及び現地視察に基づく、グループワークによる議論を通じて得られた意見等を総括する。

今期の審議会での議論においては、同事業の実施にあたり、「住民参画型の学び」、「世代間交流」、「地域資源」、「持続可能性・つなぐ役割」、「情報（成果物）発信」、「アフターコロナ」の６つの観点が重要であることが提示された。下図は、市民センターにおける同事業のあり方と各観点の位置づけを示したものである。

同事業の実施を通じ、市民センターが地域づくりに向けた学びを推進していくための今後の展開について、以下、これら６つの観点ごとにその望ましい方向性を示し、答申とする。



1.「住民参画型の学び」

市民センターでは、住民が地域で活動してみたいという意欲を喚起し、地域の課題等の解決に主体的に取り組もうという意識を高めてきた。また、住民の学びのプロセスを大切にし、地域課題解決のためのプロセスやアプローチを、職員と地域住民が共有しながら事業を進めてきている。

【住民ニーズを把握したオープンな市民センターとしての役割】

これまでも市民センターは、地域住民にとってオープンな存在であることに努めてきたが、すべての世代の住民に向けたオープンな存在であることを意識し、企画や事業への参加も常に開かれたものとなるような工夫が望まれる。

事業を展開するにあたっては、地域住民がやりたいことを考え、その意欲を引き出すために、住民のニーズを把握しておく必要がある。「中野ふるさと学校」（高砂市民センター・宮城野区中央市民センター）の事例にみられるように、地域住民の思いを言葉や形にできる事業であることが望ましい。

地域には多様な知識や技能を持っている方々が複数存在している。「まいぷろ（Miyagino Young PROgram)」（宮城野区中央市民センター）の事業の事例のように、市民センターが持っている情報や人脈を有効に活用し、人的リソースをつなぐ場所としての市民センターの役割を発揮すべきであろう。

【住民参加型のプロセスの重視と活動の継続的な展開】

従来までの取り組みにおいて、地域課題解決のためのプロセスやアプローチを市民センターが地域住民と共有し、ともに検討しながら事業を進めることが重要であるとの認識が得られている（事例「かむりの里いきいきプロジェクト」（根白石市民センター・泉区中央市民センター）。これからは、市民センター事業としての取り組みが終了したとしても、関わった住民を中心に新たな参加者も呼び込み、主体的に活動を継続し発展していけるような展開が複数生まれることが望ましい。

【地域を越えた市民センター間の交流の促進】

市民センターは、それぞれが単独に事業を展開するだけではなく、他の地域の住民や関係者同士が相互に交流する場を提供することで、事業の質が高まり、さらに広い地域で事業が展開することにつながるであろう。

また、事業をマネジメントしている職員も、地域を越えて学び合い、市民センター間でコーディネートスキルを共有することで、職員全体のスキルの一層の向上を図っていくことが期待される。

２．「世代間交流」

市民センターは「子ども参画型社会創造支援事業」「若者社会参画型学習推進事業」「住民参画・問題解決型事業」という３つの事業を推進する中で、連携を視野に入れながら事業を展開してきた。

多様な世代の交流を通して、自己有用感・自己肯定感、自己達成感、コミュニケーション力、地域への帰属意識、主体的な行動力などが培われてきている。

【多世代間交流の促進】

子ども事業、若者事業、大人事業と個別に事業を行っていく中で、子供、若者、大人といった異なる世代のニーズを受け止めることが前提となる。

そのためには、保育所や幼小中高等学校、老人ホーム、事業所など、異なる世代が所属する組織や機関と市民センターの協働を進めていく必要がある。

子ども事業、若者事業、大人事業と３つの事業を個別に行っていく中でも、多世代間交流を意識することが重要であろう。例えば「仙台園プロジェクト・人」（若林区中央市民センター）や「かむりの里いきいきプロジェクト」（根白石市民センター・泉区中央市民センター）のように、一つの事業の中でも、世代が交差する場面を複数創出することができる。また、子ども事業、若者事業、大人事業が、個別に事業を展開しながらも、相互に乗り入れる機会を設定するなど、事業の枠を超えた展開が見られることが期待される。

【フラットな関係で生涯学び合える場の提供】

市民センターは、生涯学習の場であり、大人も学び続けて自身の成長を実感できる場である。世代間交流を通して、大人世代が若者や子ども世代に一方的に教える立場をとるのではなく、世代間でフラットに学び合えるような場が形成されることを念頭に置くべきであろう。

【地域コミュニティ形成への寄与と子育て世代の参画】

市民センター事業を展開することによって、地域の住民の間で顔の見える関係性が生まれ、コミュニティの形成に貢献している。一方で、子育て世代の参画が少ないことが、市民センターの大きな課題となっている。これまで参加できていなかった子育て世代が気軽に参加できるような環境づくりや事業展開を積極的に行うようにしたい。

3.「地域資源」

「住民参画型学習事業」では、歴史や文化、人材や産業などの地域資源に着目し、地域の課題や魅力を発見し、地域への関心を高め事業を進めることで人材育成にもつながってきた。

今後も、これまで取り組んできた事業(コト)も地域資源として広くとらえるなど、多様な世代の観点や、結果だけでなくプロセスも大切にするなどの多角的な見方で再発見、再評価をする必要がある。

それぞれの地域の特色を明確にし、自信をもって他地域、他団体にわかりやすく、事業内容や地域の魅力を発信する必要がある。

【地域資源を広くとらえ、再発見・再評価して活用する】

地域資源には有形無形のあらゆる要素があることを再確認する。歴史や自然、建物だけではなく、ヒト・コト・モノ・場など広くとらえる。新しいモノ、新規事業に目がいきがちになったりするが、年中行事や何気なく普段行ってきたコト、知恵や技を持つヒト、地域に関心や意欲のあるヒトなどを再度価値あるもの、地域資源として再評価する。

これまで各世代が取り組んできた事業（コト）も地域資源である。また、同じものを見ても、地域内外や世代によって見方や考え方は異なる。それらを関連付け、世代間交流をし、お互いを評価し合うことで価値の再発見につなげる。

【地域資源を多角的な見方で探究し、発掘し活用するプロセスも大切にする】

地域資源や地域の魅力を、様々な世代が様々な角度から丁寧に掘り起こしていく。事業は成果だけではなく、そのプロセスそのものを大切なものとして評価していく必要がある。地域資源の発掘やそれを活用することが、ヒトも地域も成長していくことにつながる。単年で終わらせるのではなく、数年かけるゆとりある進め方も事業の継続や人材育成のためには必要である。

【地域の特色を明確にし、わかりやすい言葉で自信を持って発信する】

魅力が全くない地域は一つもない。それぞれの地域の魅力を見つけ、活用していくことで、他地域との違い、差別化することができる。

事業では、地域外の視点をもらうなど、他者から地域を知ることによって、明らかになる地域資源や特色もあり、地域や地域のヒトへの愛着につながり、活動の視野や可能性も広がる。

身近で当たり前と思っていたヒト・コト・モノ・場を価値あるものとして評価し、自信を持ってわかりやすく発信する。互いの事業の手法やプロセスを発信することで、他の市民センターや他の事業の新たな学びや活動の糧となり、取り組みを広げる波及効果も期待できる。

４．「持続可能性・つなぐ役割」

市民センターは、地域の拠点であり、多様な世代や能力を持った人が集まり、地域の現状や課題などの情報が集まる場である。

継続的な自立した事業にするために、地域に主体的な人材を発掘する、幅広い世代や地域を巻き込んでいくなど、世代間や団体間がつながり、事業が継続するよう支援を行う必要がある。

また、未来に継続すべき事業か、継続できる事業かを試行錯誤しながらも、実行することが大切である。

【地域の自立に向けて、地域の持続性を支える】

市民センターは主ではなく、あくまでも地域の自助や自立に向けての裏方（サポート）であるため、住民主体の活動や自立に向けた支援を行う。

地域の自立するタイミングを逃さないよう、人や地域の育成ともに、役割分担や引き際も考えながら行うことが、持続可能な地域づくりにつながる。

【互いの情報交換や情報共有から基礎や仕組みづくり】

多様な世代や団体が集い、情報が集まる市民センターは、人と人、他団体や他事業、他地域などとのつながりを構築することができる。

また、互いの情報交換や情報共有をすることで、人や団体といった地域資源をうまく活用し、地域活動の基礎やきっかけ、そのための仕組みをつくることも大切である。

【現在から未来へつなぐ】

一時的なイベントで集客や経済効果などをねらうこともあるかもしれない。それも認知してもらうためには必要かもしれないが、できることや続けられること、地域や団体の身の丈を知ることも大切である。

地域活性化に向けた事業は、単年度でできることではない。数年かけることも考え、成果だけを求めるのではなく、途中のプロセスがとても重要である。試行錯誤しながら実行することで、続けたいもの、つなぎたいものは何かを明らかにすることもできる。

実施する、活躍する人が楽しみながら、評価をされ、達成感を持てるような事業にする。参加者も安心して気楽に、リピーターや誘い合って参加できる活動を考える。

地域に残る人だけではなく、地域外に出ていく若者も育てるイメージを持つ。事業の参加者や活動内容も変わったとしても、思いや願いが引き続きつながっていくような事業を考える。

5.「情報（成果物）発信」

コロナ禍により、直接人々が市民センターに集うことが制限されたこの３年間は、人々から豊かな学びや交流の機会が奪われるという、誰も経験したことのない日々であった。

しかし、この間も市民センターでは、この未曽有の状況に対応すべく「デジタル」と「紙媒体」の併用を継続させてきた。ここでは、その課題を洗い出し、新たな提案を試みる。

【情報発信に見られる課題】

情報発信を行う場合、利用者が「長時間見ない」「表面だけしか見ない」などの行動特性があり、その違いに対応することが課題となる。また、市民センター主催のイベントに参加したいと思っても、高齢者が「二次元コード」の読み込みができないなど世代間で情報発信の状況に差が見られる。また、情報発信されている地域とそうでない地域の差をどう埋めていくかも課題となっており、まちづくりのためには「子ども世代」を取り込まないと継続性がなくなる懸念がある。

【「世代をつなぐ」情報発信の提案】

情報発信には、高齢者・若者など「世代をつなぐ」役割があり、情報発信を通して多世代を巻き込んでいくようにしたい。コロナ禍により急速に進展した「社会のデジタル化」はもう止められないが、従来の「紙面」での発信も大切なものとして活用していきたい。

具体的な例としては、申し込み時、「二次元コード」を活用した方法と従来の紙媒体の申し込み方法など複数の方法を準備し、市民それぞれの世代に合わせた、情報発信を工夫することが望まれる。

【「ニーズをつなぐ」情報発信の提案】

コロナ禍により、地域や外に出て行くことが制限されたり、積極的に出かけたりすることが減ってきたため、今後市民センターでは、市民一人ひとりにどのような学びのニーズがあり、どのようなことを求めているかを的確に探っていく情報発信が必要である。そうした具体的なニーズを把握した上で、どういうターゲットにどういう方法でアプローチしていくのかを吟味し、市民の学びの「ニーズをつなぐ」情報発信を行いたい。

なお、今後の情報発信の留意事項としては、デジタルを扱う場合はセキュリティを担保しながら、即時性という良さを生かしていくこと、また、個人の SNS は追いきれないところがあるため、市民センター主催のイベント等への意見は良識ある活用を求めていくことなどが考えられる。

6.「アフターコロナ」

2011年の東日本大震災では、人々は「絆」を求めた。一方で、コロナ禍では「人との距離」が求められた。この2つに振れ幅はあるが、いずれも人との関わり方を私たちに問いかけている。アフターコロナを志向するに当たって、ここでは、コロナ禍が残したものとコロナ禍からの回復として市民センターの位置づけとその役割について整理していきたい。

【コロナ禍が残したもの】

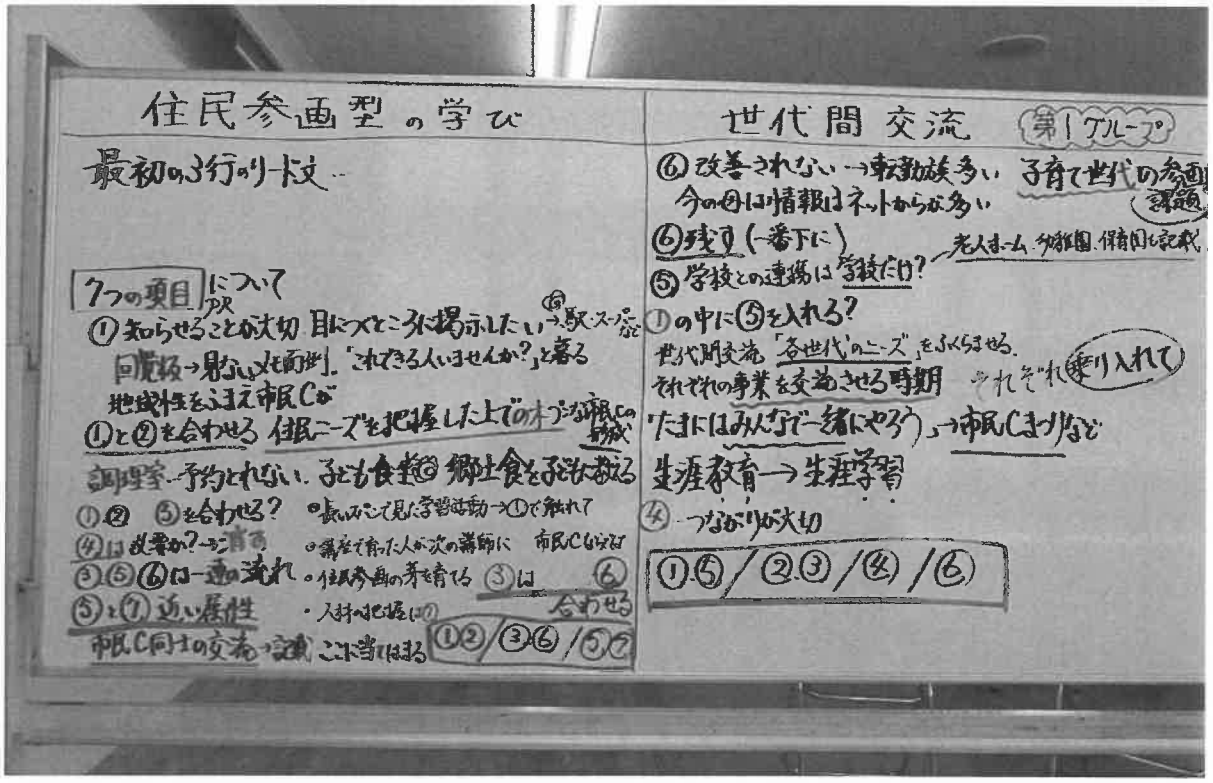
コロナ禍の3年間は誰にとってもつらいものであった。人との距離を求められ、文化やスポーツなど様々なイベントは中止となり、町から人影が消え、それに伴って市民センター利用もコロナ禍により激減した。「令和3年度仙台市市民センター事業概要」によれば、コロナ禍前の令和元年度の参加者数が319,546名であったのに対し、令和2年度は25万人減となる67,363名であった。令和3年度は87,418名とやや回復傾向にある。こうした数字の変化に伴って、市民の「学びの意欲」が減退したことは否めない。町内会や子供会などの組織が解体したところもあり、人との関わり方など多くの面においてマイナス面が顕著になった。

一方で、このマイナスが逆にプラスに転じた側面もあった。オンライン技術により、遠隔地とのやりとりが可能になるなど、新しい情報の取り方、誰とでもつながることができる関わり方が急速に普及した。コロナ禍という負の体験により、逆に「どのように人と関わったらよいか」、「大切なものは何か」を深く考える機会になった。地域での防災訓練などを継続してきた地域もあり、つながりを求める動きもあった。

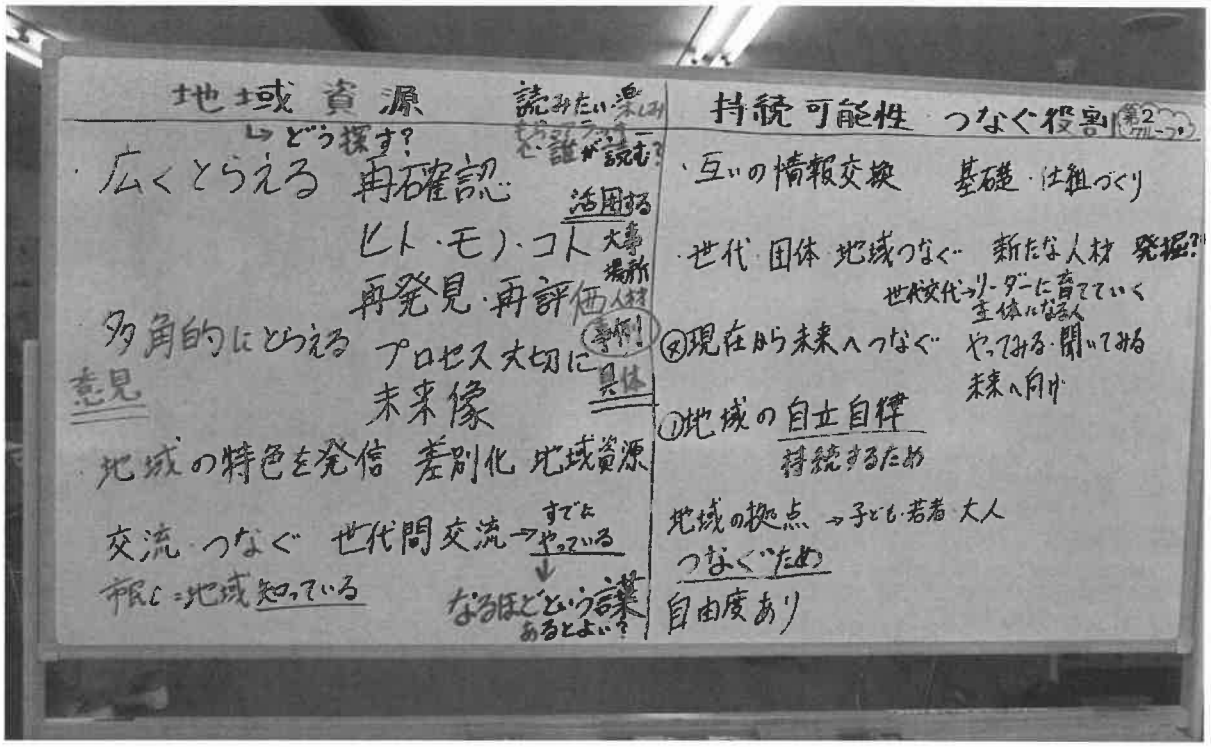
【コロナ禍から回復していくための市民センターの役割】

今後コロナ禍から一人ひとりが回復していくことが求められる。それは人によっては、旅行であったり、読書であったり、人と語り合ったりすることなど、多岐に亘る活動が活発になることが予測されるが、その選択肢の重要な一つとして市民センターが位置づけられる。コロナ禍前に戻ること、元通りになることを求めるではなく、アフターコロナに合わせて新たなもの、新たな学びを創出していくきっかけにしたい。

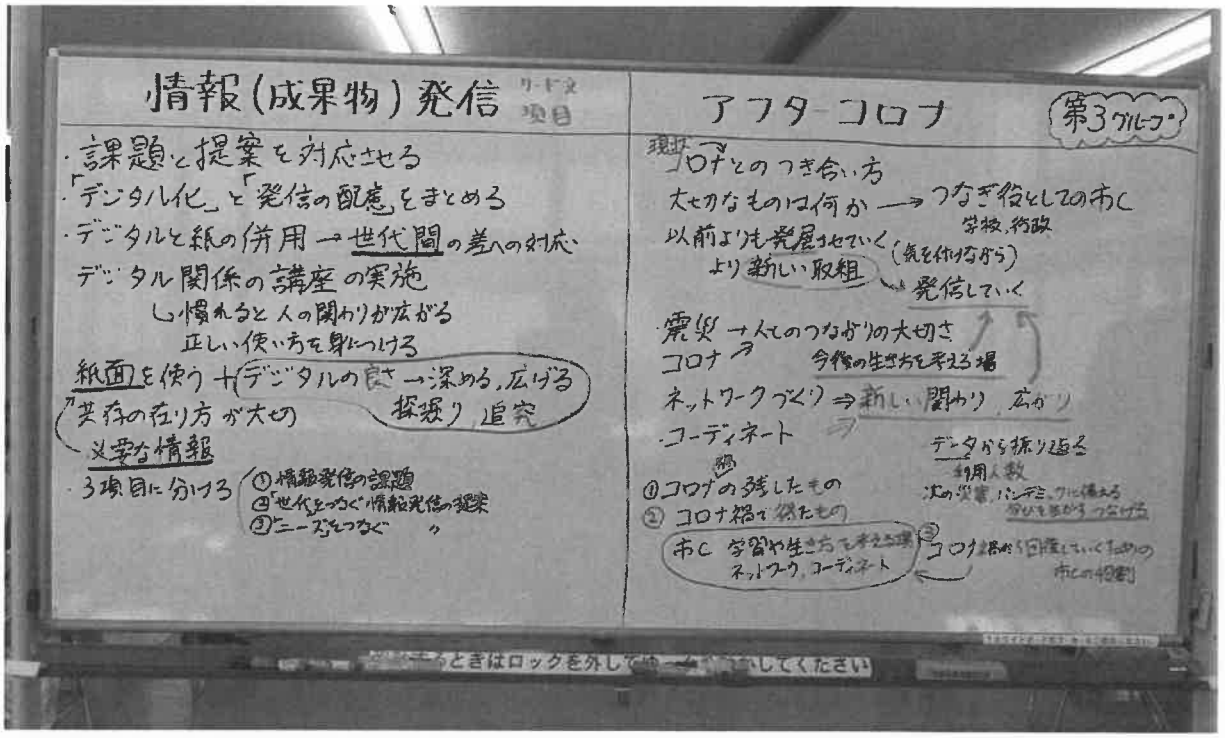
こうした新たな試みを実現させていくために、新たな人材を入れていく、また、育てていくなどの手立てが必要となるだろう。コロナ禍から回復していくために、今後のポイントは地域の人のつながり、ネットワークづくりであり、市民センターは、地域と学校や行政などを含む様々な主体のつなぎ役としての役割が期待されると考える。



ホワイトボード（1グループ）



ホワイトボード（2グループ）



ホワイトボード（3グループ）

おわりに

今期の仙台市公民館運営審議会で検討してきた「住民参画型学習事業の成果と今後の展開について」を通して、あらためて認識を深めることができたのは、仙台市内の各市民センターが市民の地域生活に深く根づき、市民が市民センターでの多様な学びを通して協力し合って地域生活を営んでいる姿である。そして、その実現に向けて市民に寄り添い支えているのが市民センターの職員・関係者であるという再認識であった。

このことについて委員が会議を重ねるごとに気づきを蓄積していくことができたのは、毎回の会議で事例発表が事業担当者からあり、それに基づいた具体的な議論をはかることができたこと、また現地視察調査を行い、実際に住民（子ども、若者、大人）が生き生きと活動している姿、その背後にそれを支援している市民センター職員の姿を見ることができたことにより、肌感覚で事業成果を感じることができたからである。

こうしたリアルな内容に踏み込んだ議論は、毎回の会議で小グループに分かれて議論を深め合う形式をとり、そのグループに各区中央区民センター長など現場担当者が入って、その場で具体的な説明をもらいながら、市民の思いを汲み取りより現場に即した議論になっていくことができた。また、各グループには社会教育主事も入り、ファシリテーター役として、議論の進行とホワイトボードへの記述（議論の「見える化」）を担った。「参画型学習事業」の成果を検討する会議自体が「参画型」の意義と効果そのものを体感できるような進行のもとに行われた。このような質的な深め合いによって、今後の住民参画型学習事業の展開に向けて、６つの観点を抽出して提言を導くことができた（おそらく、このようなプロセスによる導きの成果は、単なる数量的なアンケート調査からでは見出し得なかったのではなかろうか）。「住民参画型の学び」、「世代間交流」、「地域資源」、「持続可能性・つなぐ役割」、「情報（成果物）発信」、「アフターコロナ」という６つの観点は、一元的な視野からとらえた個々に断片的な観点ではなく、それぞれの観点の内容記述にある通り、住民参画型学習事業の具体的実践を多元的な視野からの練り合いによって見出したものであり、それぞれが有機的なつながりを持っている。まさにその生命的な全体としての営みが、地域住民に対する日々の市民センターの存在意義そのものなのであろう。

今期の会議期間は、世界的な新型コロナウイルス感染拡大に対する行動制限を、市民も市民センターも経験した期間となった。この期間を経て、市民はあらためて健康とつながりの意識を再確認し、社会はデジタル化の進展が一層進み、人間の学習活動にとって AI との共生も世界的な話題になっている。そのような人類史的変化が起こったこの期間の中でも、ぶれずに地に足がついた議論を深めることができたのではないかと考える。東北の地方中枢都市、仙台市に住む市民が学び合い、協力し合って生活し、より一層の生きがいと幸福感の醸成をはかる場としての仙台市市民センター住民参画型学習のますますの充実を切に願う。

資　料　編

R3 教生第 1622 号
令和 3 年 11 月 11 日

仙台市公民館運営審議会
会長　松田　道雄　様

仙台市教育局生涯学習支援センター
センター長　木田　利久

住民参画型学習事業の成果の確認と今後の展開について（諮問）

このことについて、社会教育法第 29 条第 2 項の規定に基づき、別紙理由書を添えて諮問します。

（別紙）

理　由　書

本市市民センターでは、「市民自ら地域課題に向き合い、住み良いまちづくりにともに取り組むことができるよう、市民の主体的な学びを支援し、学びを通じた人づくりに取り組む」住民参画型の学習事業を、大人、子ども、若者の各世代を対象として取り組んできました。

若者を対象とした「若者社会参画型学習推進事業」は平成 22 年度に開始し、大人を対象とした「住民参画・問題解決型学習推進事業」及び子どもが対象の「子ども参画型社会創造支援事業」については、平成 22 年 8 月に仙台市公民館運営審議会から提案された、「市民センターを拠点とした新しいまちづくりの提案―仙台プラン―」を踏まえ、平成 23 年度に開始しています。

10 年以上にわたり実施してきた本事業は、地域づくりを牽引する人づくりに貢献してきましたが、社会環境が大きく変化する中で、地域社会からの要請や期待に沿うよう、様々な世代の市民が、持続可能なコミュニティづくりに主体的に参画する意識の醸成を更に進めていく必要があります。

このため、住民参画型学習事業におけるこれまでの取り組みが、事業参加者をはじめ地域やまちづくりにどのような成果をもたらしたかを確認していただくとともに、市民センターが地域づくりに向けた学びを推進していくための今後の展開についてご検討いただきたく、諮問いたします。

仙台市市民センターの施設理念と運営方針

令和元年10月改定
仙台市教育委員会
生涯学習支援センター

はじめに

仙台市公民館運営審議会からの答申を基に、平成20年12月に「仙台市市民センターの施設理念と運営方針」を策定し、５年経過した平成25年度に見直しを行い、平成23年３月の東日本大震災、同年５月の社会教育施設としての役割を堅持した上での区中央市民センターの区役所移管、平成26年度の生涯学習支援センターとしての機能強化等を踏まえ、平成26年４月に改定を行ったところである。

改定以降、本市では、教育の振興に関する施策の大綱（平成27年12月）等が、そして、本市教育委員会では第２期仙台市教育振興基本計画（平成29年１月）等がそれぞれ策定されたところであり、市民センターにおいては、これら計画等を踏まえた事業の企画・実施等が行われているところである。

また、仙台市震災復興計画（平成23～27年度）の計画期間が終了する中、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例（平成27年７月施行）、仙台市障害を理由とする差別をなくし障害のある人もない人も共に暮らしやすいまちをつくる条例（平成28年４月施行）、仙台市いじめの防止等に関する条例（平成31年４月施行）等の制定、平成31年４月の区役所まちづくり推進部の新設など、市民センターをとりまく情勢が変化しているところである。

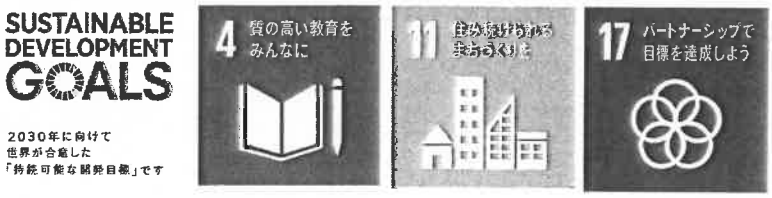
こうした中、改定後５年を目途とした見直しを行うため、平成29年11月に仙台市公民館運営審議会に「「仙台市市民センターの施設理念と運営方針」の見直し（第二次）のあり方について」諮問を行った。

審議会においては、市拠点館である教育局生涯学習支援センターの「学びのまち・仙台　市民カレッジ事業」及び「学びを支える人材育成推進事業」の事業評価を行い、答申検討の一助にしていただきながら、「拠点館の役割の再検討及び記載の明確化」、「『震災を踏まえた市民センターの役割と取組』及び『市民センターの施設管理の運営方針』の記載事項の内容・構成の再検討」を中心に協議いただいた。

事業視察も含め、合計13回、約１年半にわたる審議会の成果として、令和元年７月に「『仙台市市民センターの施設理念と運営方針』の見直し（第二次）のあり方について」の答申がまとめられ、見直しに係る意見やＳＤＧｓとのつながりを意識すること等の提言をいただいた。

上記答申における意見等を受け、併せてこの５年間の社会情勢、教育環境の変化を踏まえ、このたび、「仙台市市民センターの施設理念と運営方針」を改定するものである。

※ＳＤＧｓ（2030年に向けて世界が合意した17の「持続可能な開発目標」）のうち右記の３目標を表記した。



仙台市市民センターの施設理念

市民センターとは、次の３つの機能が一体となって運営される社会教育施設である。

1　市民の学びのプロセスに沿った学習支援のための諸機能を有し、あらゆるライフステージに応じた市民一人ひとりの学びを総合的に支援する、市民との協働による市民本位の生涯学習の支援拠点としての機能

2　子どもから高齢者までのあらゆる市民が集い交流し、多様な市民による様々な活動が主体的に行えるよう支援する場や機能を持った市民のための市民が主役の交流拠点としての機能

3　学びを通して地域の人と人とをつなぎ、住みよいまちづくりにつながる人づくりを行う地域づくりの拠点としての機能

仙台市市民センター事業の運営方針

1．市民センター事業の目的

1）市民センター全体の事業目的

市民センターは、それぞれの地域での市民ニーズに応じた多様な事業を実施することにより、市民一人ひとりの主体的な生涯学習活動が充実し、その活動をきっかけとして仲間が集い交流が生まれ、その相互の交流を通して住みよい地域づくりにつながる自治活動が活発になるなど、それぞれの地域社会のより良い形成に寄与する“人づくり”を目指す。

【重点方針】

・全ての市民センター事業は、この目的に向かって計画性を持って実施する。

・実際の事業の企画・実施にあたり、職員は「きっかけ」「仕掛け」「働きかけ」といった社会教育的関わりを常に意識し、市民の主体的な「学び」を支え、市民と協働して事業に取り組む。

・職員はこのような目的が達成されているかどうかを自己点検・評価するとともに、市民・地域住民による評価を受け、事業の改善に絶えず努める。

・東日本大震災での経験を踏まえるとともに、震災からの復興を見据え、地域課題の解決や地域づくりの担い手の育成に向けた取組の強化を図る。

２）拠点館事業の主要な目的

拠点館事業の主要な目的は、本市における、あらゆる市民のライフステージごとの学習ニーズに対応した、多様な生涯学習事業の計画的かつ体系的な推進である。さらには、指定管理者制度の下で事業を受注している地区館（地区市民センター）に対して、市拠点館（生涯学習支援センター）はその果たすべき業務の目的・目標を設定するとともに、区拠点館（区中央市民センター）は定期的に事業を評価し必要な助言を行うなど、発注者としての地区館事業へのマネジメントを行い社会教育施設としての質の確保を図ることである。

【重点方針】

・拠点館は、体系化された事業計画と社会教育の専門性を持って、市民センター事業全体の質を維持し高めるものとする。

・拠点館職員は常に専門性の維持・向上に努め、地域課題を踏まえた調査研究事業の充実と地区館支援のための環境整備に重点的に取り組むものとする。

３）地区館事業の主要な目的

地区館事業の主要な目的は、地域を基盤とし、地域づくりにつながる人づくりを行うことであり、市民一人ひとりが「出会い・ふれあい・学びあう」ことでつながり、さらには市民自ら地域課題に向き合い住み良いまちづくりに協働して取り組むことができるように支援することである。

【重点方針】

・地区館は“地域づくりの拠点”としての機能を果たすことを重点目標とし、地域のコーディネーターの役割を担うものとする。

・地域の連帯感を高め豊かな地域社会を創るために、地域における市民の主体的で多様な生涯学習活動を支援し、質・量ともに充実するものとする。

２　市民センターの役割

１）　市拠点館（生涯学習支援センター）の基本的な役割

(1) 市民センターにおける生涯学習事業体系の策定と行動計画の立案、及び全市にわたる生涯学習事業の推進

本市における生涯学習に関わる機関・団体との役割分担を踏まえ、学校教育や関係局・区役所とも連携しながら、市民センターが担うべき生涯学習事業体系を策定し、事業目標を定めた行動計画にしたがって本市の生涯学習事業を着実に推進する。併せて、人材育成にかかる事業を中心とした生涯学習事業を総合的・体系的に実施する。

(2) 生涯学習推進のための専門性の向上

少子高齢化・国際化・情報化、男女共同参画、多様性配慮などの現代的な課題、ＳＤＧｓや本市が抱える諸課題への先進的な取組み、及び市民のライフステージごとの多様な学習ニーズの把握と効果的なプログラムづくり等の調査・研究を推

進するとともに、その成果を地区館等へ還元する。

また、東日本大震災を機に生じた地域社会のあり方、大規模自然災害の備え、エネルギー問題等の社会的課題や社会からの要請に対応する取組についての調査・研究を推進する。

(3) 市民一人ひとりのニーズに対応した生涯学習支援体制の充実

〔学習活動のネットワーク化とリーダー等の養成〕

市民相互の学習活動やそのネットワーク化を支援するとともに、学習リーダーや学習ボランティアを養成し、その活動を推進する。

〔生涯学習に関する関係機関等との連携・協力の推進〕

生涯学習について、小学校、中学校、高等学校、大学等、市民活動団体等関係機関・団体との連携・協力を推進する。

〔生涯学習情報の計画的体系的な収集と提供〕

計画的で体系的な生涯学習情報の収集と提供を行い、生涯学習相談事業の充実を図る。

(4) 指定管理者制度下での指定管理業務のマネジメントの推進

市民センターの指定管理業務を統括する立場から、地区館業務の目的とそのための事業の目標及びその要求水準の考え方を明確にし、地区館ごとに事業を評価できる体制を構築する。

(5) 職員の育成

〔職員研修の体系化と専門研修の充実〕

初任者・中堅者・館長などに対する経験や役割に応じた体系的な研修や、社会教育を担当する職員としての専門性を高める研修の充実を図る。

〔職員への助言及び支援体制づくり〕

事業が具体的な目標のもとに計画的に推進できるよう、事業を担当する職員への専門的な助言や支援のための体制づくりに努める。

2） 区拠点館（区中央市民センター）の基本的な役割

(1) 区内の生涯学習事業の推進

〔区内の生涯学習事業の推進と地域リーダーの発掘・育成〕

地域の諸団体や学校等、区役所関係課、区内地区館などとの連携を図り地域課題に取り組むことで、区内の生涯学習事業を推進するとともに、区内の地域リーダーの発掘・育成に努める。

〔区内の市民の学習・グループ活動への支援〕

区内の生涯学習活動を幅広く支援するため、生涯学習情報の収集と提供及び相談事業を充実させるとともに、活動する市民・団体等のグループ化やネットワーク化への支援に努める。

(2) 区内地区館事業への支援

〔関係諸団体との連携の推進〕

地域団体、ＮＰＯ・ボランティア団体等の民間諸団体や、区役所関係課等の行政機関、小学校、中学校、高等学校等の教育機関との連携によって地区館事業が活発に展開されるよう、地区館を積極的に支援する。

特に、地域課題の把握とその対応等に向け、区役所関係課と地区館とが連携して取り組み、市民協働による地域づくりが推進されるよう支援する。

〔家庭及び地域での教育力向上、ジュニアリーダーの育成支援〕

地域での子育て支援や子どもが育つ環境づくりのために、地域団体、民間諸団体、区役所関係課等、学校等、嘱託社会教育主事研究協議会支部等と連携し、地区館において、家庭及び地域社会の教育力の向上に資する取り組みとジュニアリーダーの育成支援が十分に行われるようともに取り組む。

〔地区館職員の育成〕

定期的な連絡会の開催や、区内地区館が連携して進める事業の支援など、地区館職員の育成が図られ、かつ効果的な事業が推進されるよう働きかけを行う。

(3) 指定管理者制度下での区内地区館業務のマネジメントの推進

地区館業務の目的、各事業の目標及び要求水準をもとに、それぞれの地域ニーズを地区館職員と共有し、より効果的な事業の実施に向けた助言等を行うとともに、事業の結果について的確な評価を行うことで、地区館事業の質・量の充実が図られるよう支援に努める。

3） 地区館（地区市民センター）の基本的な役割

【取組指針】

社会教育施設としての地区館に求められる下記の機能は、相互に関連を持ちながら総合的に発揮されなければならない。それにより、これまで市民センターに関心のなかった人々が、地区館事業に様々な形で関わることができ、地区館が多くの市民の参画を得ながら地域づくりの拠点として活発に機能することになる。

また、地区館の職員は、区拠点館の支援を受けつつ、地域に積極的に出向きながら、これらの機能が総合的に発揮されるよう「きっかけ」をつくり、「仕掛け」「働きかけ」を行い、地域住民や地域の諸団体等と協働して事業を展開していくものとする。

(1) 地域住民本位の生涯学習拠点機能

〔学習ニーズ・地域課題を踏まえた特色ある事業の実施〕

地域住民を対象にしたアンケート調査や事業運営懇話会、日々の地域情報の収集などを通して地域住民の学習ニーズと地域課題を把握し、目標を明確にした上で特色ある事業を実施する。

〔事業の魅力づくりと参加しやすい条件づくり〕

事業の企画にあたっては「学びを通じての人と人とのつながり」を基本方針とし、地域住民が楽しく参加したくなるような工夫（魅力づくり）や参加しや

すい条件を整えるよう努める。

〔市民参画の推進と市民の活動の育成支援〕

市民自らが学ぶことで主体的な活動が地域で多様に展開できるよう、市民参画による事業を積極的に推進するとともに、地域を基盤としたサークル活動や市民活動、ボランティアやジュニアリーダーの育成支援に取り組む。

(2) 地域の交流・拠点機能

〔地域住民の交流の場、子どもたちの交流の場の確保〕

多様な地域住民が気軽に集い、楽しく交流のできる場と機会を設ける。

特に、地域の中で見守られ育まれるべき次代を担う子どもたちのための子育て支援と青少年の交流の場、地域住民と児童生徒との交流の場の確保に配慮する。

〔様々な地域ネットワークの拠点機能＝プラットフォームの確保〕

地域にある様々な団体、ＮＰＯ、ボランティア等が共通の地域課題のもとに集まれるネットワークの拠点としての機能を持つ、プラットフォームを確保するよう努める。

(3) 地域のコミュニティづくり機能

〔コミュニティ意識の醸成〕

地域住民と協働し、地域の歴史・自然・行事などの地域資源を活かした地域文化の継承と創造の事業に継続的に取り組むとともに、地域の魅力と課題の発見を通して、多くの地域住民が地域と関わることができるよう積極的に働きかけ、地域住民のコミュニティ意識の醸成を図る。

〔地域活動を担う人材の育成〕

地域課題を踏まえ、地域の諸団体や学校等と連携しながら、地域での多様な活動を担う人材の育成に努める。この場合において、青少年を含め幅広い世代の人材育成にも配慮しながら取り組む。

〔地区館事業に市民が主体的に関わる仕組みづくり〕

地域に根差した地区館事業を市民と協働で推進するために、地域住民が地区館事業に主体的に関わる仕組み（地域住民による地区館ごとの運営協議会等）を創り活かす。

(4) 地域のコーディネート機能

〔地域にある機関・団体等のネットワーク化の支援〕

町内会・ＰＴＡ・商店街等の地域団体、ＮＰＯ等の民間諸団体、学校等の教育機関や区役所等の行政機関等と連携し、地域住民とともに地域課題に取り組むためのネットワークが構築されるよう支援する。

〔地域と行政機関との仲介・調整〕

“地域の声”を施策や事業につなげるために、地域の諸団体等と行政機関等との仲介及び調整の窓口機能を担う。

(5) 地域の情報ステーション機能

〔地域の資源等の保管と公開〕

地域にある様々な資源（歴史、文化、自然、祭礼行事、施設、人材等）などに関する情報を多様な媒体に整理・保管し、地域住民が必要に応じて閲覧し活用できる仕組みを整える。

〔生涯学習情報・地域情報の収集と提供〕

地域内の学校や社会教育施設、区役所などの行政機関からのお知らせや催し情報のほか、地域団体や各種サークル、ＮＰＯなどからの活動情報や募集情報などを随時収集・整理し、適時、地域住民に提供する。

仙台市市民センターの施設管理の運営方針

１）市民サービスの向上

(1) 利用者の立場に立ったサービスを行う。

(2) 利用者の安全安心の確保に積極的に取り組む。

(3) 利用者のプライバシーを保護するよう十分配慮する。

２）市民交流スペースの確保とオープンスペースの活用

市民の誰もが気軽に立ち寄り、交流のできる場と機能を確保する。

地区館のオープンスペース等に関しては、地域住民にとって魅力ある場となるよう、地域住民の意向を十分に踏まえた各館独自のルール及び運営体制を設けるなど、その利用を促進する。

３）地域住民等との顔の見える関係づくり

地区館は、地域づくりの拠点としての機能を踏まえ、施設管理における日常の様々な場面において、地域住民や地域団体等との顔の見える関係をつくり、信頼され、信頼に応える運営を行う。

震災を踏まえた市民センターの役割と取組

未曽有の被害をもたらした平成 23 年３月の東日本大震災により、大きな被害を受け、建替えを余儀なくされた市民センターがあった一方で、地域住民の避難所となった市民センターも数多くあった。市民センターは、住民に身近な施設として住民の安全を守る役割などを担ったところである。

そして、これまで市民センターにおいては、この震災を踏まえ、震災復興や地域の防災・減災に資する事業、地域の絆を深める事業等に取り組んできたところである。

現在、地域においては、平時から地域団体や住民等が連携しながら、地域における防災体制を構築するなどの安全・安心な地域づくりが求められていることから、災害・防災等に関する知識を深め、防災・減災意識の向上を図るとともに、地域課題の解決や地域づくりの担い手の育成に向けた取組の強化を図ることが重要となっている。

１）災害時における役割

現行の仙台市地域防災計画において、市民センターは、必要に応じて開設される補助避難所に、高砂市民センターは指定避難所に位置づけられており、食料、飲料水等の物資が備蓄されている。

災害時において避難所となる市民センターは、地域防災計画等に基づき、住民等の安全を守るとともに、多様な視点に立ち、求められる配慮を適切に行いながら、避難所の運営に協力し支える役割を担うこととなる。住民に身近で信頼される施設として、災害対応力の向上に努め、災害時における役割を十分に果たしていくものとする。

２）地域の防災体制づくりへの支援

市民センターは、これまで培ってきた小学校、中学校、高等学校及び地域団体等とのネットワークを活かしながら、地域のコミュニティづくり機能やコーディネート機能等を十分に発揮し、防災訓練等も含め、地域の防災体制づくりに資する取組を行うとともに、地域主体の復興まちづくりにおいても、市民センターとしての役割を果たしていくものとする。

３）震災を踏まえた講座等の実施

地域の生涯学習の拠点として、地域の防災・減災に資する講座等を積極的に開催するとともに、震災の経験や教訓、地域の歴史や文化等を広く発信していく。この場合において、次世代への継承、担い手の育成に向け重点的に取り組むものとする。

（付記）

「仙台市市民センターの施設理念と運営方針」は、改定から５年間を目途に見直しを行う。

住民参画型学習事業の経緯（平成22年度～令和4年度）

		平成22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
		第1期			第2期		
若者社会参画型学習推進事業	青葉	「情報屋台村ーはじめの一歩」	→	→	若者によるまちづくり実践塾	→	→
	宮城野	「EASTプロジェクト～若者によるまち育て実践塾～」	→	→	→		
						まいぷろ・Miyagino for Young PROgram	→
	若林	ヤングエンパワーメント講座					
			仙台白菜復興プロジェクト	→	仙台園プロジェクト・人	→	→
	太白	若者によるまちづくり実践塾「若者情報発信プロジェクト」	→	→			
			たいはく学生まちづくりフォーラム	→	→		
						仙台学生サークルネットワーク事業「つながりんぐ」	→
	泉	「若者によるまちづくり実践塾【泉区版】」	→	若者によるまちづくり実践塾			
					ICP Izumi Community Project	→	→

			第1期			第2期	
住民参画・問題解決型学習推進事業	青葉		地域元気クラブ	→	→	元気アップ柏木実行委員会	→
							三本松緑地活性化委員会
	宮城野		地域づくり総合講座	地域づくり講座「東仙台輝きクラブ」	→	→	→
							中野ふるさと学校
	若林		まちづくりin六郷	子どもたちに伝えたい六郷の暮らし～平成の六郷をふりかえる	→	わたしのふるさとプロジェクト	→
	太白		たいはく子育て支援ネットワーク事業	→	→	→	→
	泉		鶴が丘ハチポチ・ステーション				
				みんなの居場所～コミュニティ・カフェを作ろう	→	→	→
				泉区西部のまち興し～かむりの里凧揚げフェスタ	→	→	→

28年度	29年度	30年度	令和元年度	2年度	3年度	4年度	実施館
		第3期					
→	→	→	→	→	→	→	区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
→	→	→	→	→	→	→	区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
→	→	→	→	→	→	→	区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
→	→	→	→	→	仙台学生ネットワーク「つながりんぐ」	→	区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
→	→	→	→	→	→	→	区中央（拠点館）

		第3期					実施館
							柏木
→	→						三本松
		地域をつなぐ『へくり沢散歩道』活用事業					柏木
		大倉ダムの魅力発信	→	→	→	→	宮城西
		ふるさと落合栗生地元塾	→	→	→	→	落合
		青陵の森ボランティア育成事業	国見ヶ丘・吉成・南吉成地域の魅力再発見	→	→	→	吉成
			折立素敵物語	→	→	→	折立
			ラララ♪歌で元気に	→			中山
					大沢・川前地域交流ネット「あがれ！天旗」	→	大沢
→							東部
→	→	→	→	→			高砂
	田子今昔物語	→	→	→	→		田子
		枡江の森　魅力発信プロジェクト	→	→	→	→	幸町
		子どもの広場（居場所）づくりボランティアの養成	→	→	→	→	岩切
					東口ゆうえんち	→	榴ケ岡
→	→	→	→	→	→	→	六郷
			ここ・そこ・どこでも　六郷ふるさと盲頭くろしお太鼓応援隊養成講座				六郷
			集まれ！わんぱくキッズ　～お父さん出番です～	→	→	→	沖野
				読み聞かせボランティア講座	→	→	若林
						若林ウィメンズオープンカフェ	若林
				地域情報紙作成講座「七郷タウン情報紙をつくろう！」	→		七郷
					子どもイベントを考えよう！		区中央（地区館）
→							区中央（拠点館）
	たいはく親子deスポフェス事業	太白おやじネットワーク事業	→	→	→	→	区中央（拠点館）
					楽元の森プロジェクト	→	山田
					みんなの広場プロジェクト	→	茂庭台
					パワフルとみざわネットワーク事業	→	富沢
							区中央（拠点館）
							将監
→		かむりの里地域いきいきプロジェクト	→	→	→	→	根白石
七北田味の歳時記クラブ	→						区中央（拠点館）
		みんなで創る紙芝居	→	→			松陵
		探求（クエスト）、自分。	てらさんぽ	今、思っていることを聞かせて！			寺岡
					かつら情報局	→	桂
				いずみ探訪～地域案内人養成講座	→	→	区中央（地区館）
				魅力あふれる高森をめざして			高森
			ミドルエイジからの地域デビュー	みせましょう！おやじの力	→	→	南光台
					エンジョイ加茂ン		加茂
					松陵の丘つながるプロジェクト		松陵
					いずみ中山ふれあいプロジェクト	→	南中山

			23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
			第1期			第2期	
子ども参画型社会創造支援事業	青葉		わたしたちのコミスク				
				ぼくらの学園～子ども参画型社会をめざして	→		
						SATC情報部ふぉるてぃお	→
							食について考えようプロジェクト
							「カッパダ川ダンス部」 「カッパダ川プロジェクト」
	宮城野		子どもによるアートな空間づくり	→			
					キミと社会をアートで結ぶ！ワークショップ「ぼくらの子ども商工会」	子ども商工会2014～わたしたちと地域をつなぐ原町キッズもりあげ隊～	
							進め！みやぎのキッズもりあげ隊 みんなの力で地域を元気にしよう
							新田まちづくり子ども計画
	若林		チャイルドボランティア「チャボ」	→	→	子どもボランティア事業　チャイルドボランティア「チャボ！」	→
	太白		食を活かした仲間づくり	→	→		
						エフエムたいはくキッズ情報局	→
	泉		作ろう！みんなの「あそびの天国」				
				キッズ隊員への道～「自助・共助・公助」ってどんなこと			
					夢をカタチに～パティシエ編～仙台の野菜deスイーツ創ろっ!!		
						アートフルいずみゆめ工房	→

28年度	29年度	30年度	令和元年度	2年度	3年度	4年度	実施館
		第3期					
							区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
→							区中央（拠点館）
→							区中央（拠点館）
→	→	→	→	カッパダ川で地域交流	→		広瀬
		青陵インパクト	→	→	→		区中央（拠点館）
				東二小やる気キッズ	→	→	区中央（地区館）
					北三番丁公園で遊ぼう	→	木町通
						中山キッズ	中山
						ゆうゆうの森プロジェクト	宮城西
							区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
→	→	キッズもりあげ隊	→	→	→	→	区中央（地区館）
→	→						東部
	復活岡田　環境子どもまちづくり計画						高砂
		みんなで支え育もう　鶴ケ谷の心を！	つるっこ画樹園～実れ！鶴心～	→	→	→	鶴ケ谷
						田子中生「福田町駅未来構想」	田子
→	→	→	→	→	→	→	拠点館
					めざせYouTuber～六郷のよさ発見隊～	→	六郷
							区中央（拠点館）
→	→	にしたがキッズ情報局	→	→	→	→	※参照
			見つける！伝える！ヒロセ川！	→	ぼくらの長町貴援隊！	→	区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
							区中央（拠点館）
							南中山
→							区中央（拠点館）
子どもまちづくり企画室	→	→					区中央（拠点館）
					子ども企画会議		松森
		南光台シアター企画室	南光台をもっと元気に委員会	南光台をもっと元気に委員会２	元気なまちづくり応援団	元気なまちづくり応援団Ⅱ	南光台
						子ども企画会議	桂

※平成26年度：区中央、中田、生出、柳生
27年度：区中央、中田、生出、西多賀、柳生
28年度：区中央、中田、西多賀、柳生
29年度：区中央、西多賀、柳生
30年度以降：西多賀

市民センター事業説明書(若者社会参画型学習推進事業)

事　業　名	担　当
若者によるまちづくり実践塾	青葉区中央市民センター(区拠点館)

1　事業の目標（ねらい）

若者が様々な人々との出会いを通して、自己のものの見方や考え方を広げたり、地域への関心を高めたりできるように支援し、将来の地域の担い手として自発的・主体的に行動できる人づくりを推進する。

2　事業内容（手法）

（1）対象者　10代後半から30歳くらいまでの若者　（高校生や大学生、社会人、外国籍も含む）

（2）登録者数　13名（大学生）

（3）活動内容　毎月１回程度　定例会を実施

【定例会の主な活動内容】

・参加者による活動テーマや方向性の検討

・フィールドワークの場所や取材対象を選定するための話合い

【今年度の主な活動内容】

・「奥州街道マップ」（Ｒ３制作）の活用の検討

・フィールドワーク・取材活動の実施

・取材のまとめと振返り

・青葉区「まち歩きまちづくり」フォーラムへの参加

・成果報告会発表（生涯学習支援センター）

・年間の振返り及び次年度計画作成　等

（4）広報　・活動紹介チラシの制作と配布

・仙台市市民センター成果報告会での成果発表

・青葉区中央市民センターHPへの掲載

3　新型コロナウイルスによる影響

・新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、リモート会議システムを活用しながら話合いや情報交換等を行った。

・フィールドワークで収集した情報をまとめた動画を制作していたが、感染リスク回避を優先したため集まることができず、未完成に終わってしまった。（今年度のメンバーが引き継いで編集を再開する予定）

・「奥州街道マップ」に掲載する店舗に対し、一部は直接取材できたものの、多くは電話による間接的な取材となってしまった。

4　令和3年度の取組み(実績)
・令和３年度は、テーマを「若者視点による青葉区の魅力発信」としたことで、参加者にとって取り組みやすく、意欲的に活動することができた。参画の度合いとしては、マップや動画の制作にも主体的に取り組むなど、事業担当者の支援の下、ほぼ若者主導による形で実施することができた。 ・年齢や学校が異なることもあり、初めは意見交換が滞るような場面もやや見られたが、次第に受講者の事業に対する意欲が向上していった。受講者が、自ら訪問先を選定し様々な人々への取材を行ったり、活動を通して得られた地域資源などの情報を発信するためにまとめたりする過程で、身近な地域に対する興味・関心の高まりや、「まち歩き」という新たな視点の獲得や視野の広がりを、自己の成長として実感できる事業となった。 ・令和３年度の成果報告会では、事業内容を広く市民に周知することができた。成果物である「奥州街道マップ」を区内市民センターに配架することで、「若者視点による地域の魅力」として発信することができた。
5　これまでの経緯（成果）
・平成２５年度から青葉区中央市民センターにおいて「青葉区まちづくり実践塾」として実施。若者自身が地域課題を見つけ、その調査・整理・分析を行い、自分たちの取組を発信することで、「若者がまちづくりに関わっていく」という事業のねらいを達成することができるように取り組んできた。これまでの主な活動として、地域と若者をつなぐことを目的としたフリーペーパーの制作や当センター入口の巨大壁画制作、多文化共生への理解を促進することを目的とした「青中国際村かるた」の制作、「青中国際村交流会」を実施してきた。 ・例年の参加者の振り返りに、本事業での活動を通して、地域社会へ参画することへの面白さ・やりがい・充実感を味わうことができたという言葉が見られ、参加者自身が変容を実感することができている。
6　課題・改善点（評価）
・各区中央市民センターの事業担当者による情報交換では、市民センターに足を運ぶ機会が少ない世代に対してどのようにＰＲをすれば参加者を継続的に確保できるのか、といった共通課題が挙げられている。
7　今後の展開・方向性
・今後も青葉区の「若者事業」では、これまで同様に年度初めの定例会で参加者自身に活動内容を検討させた上で、取り組ませていくことが望ましい。そうすることで参加者の主体性が高まり、地域に対する興味・関心が喚起され、将来の地域の担い手を育成することにつながっていき、市民センター事業の目的である「まちづくり」に資する人材を育成することにつながっていくものと考える。

市民センター事業説明書(若者社会参画型学習推進事業)

事　業　名	担　当
仙台園プロジェクト・人	若林区中央市民センター（区拠点館）

1　事業の目標（ねらい）

（全市共通）

若者の地域づくり活動への参加や，様々な人々との学び合いを通して，身近な地域をより良くすることへの意識を高め，自発的・主体的に行動しようとする人づくりを推進する。

（若林区）

自主的に考え，より主体的に動くことができる若者を育成する。

2　事業内容（手法）

（1）対象者

10代後半～30代程度（高校生や大学生等）

（2）登録者数（令和３年度）

21名

高校生３名，大学生14名，大学院生１名，社会人３名

（3）活動内容

毎月１回から２回程度

・畑づくりや野菜づくりを通しての地域貢献活動
・収穫した野菜を地域の子ども食堂へ譲渡
・若林区の魅力を発見・体験・発信する活動
・地域のイベントでのボランティア活動
・ビーチクリーンや地域清掃
・「仙台・絆サイダー」を販売，売り上げ金の寄付
・子ども参画型社会創造支援事業「チャイルドボランティア　チャボ！」やジュニアリーダー若林区連絡会「田んぼっ区」と合同での研修会（植樹活動やデイキャンプ，地域清掃など）

（4）広報

・チラシの配布（区内市民センター）
・ポスターの掲示
・ホームページに掲載
・登録メンバーによる口コミ
・Instagramの活用

3　新型コロナウイルスによる影響

・飲食を伴う活動を自粛した。コロナ前は収穫した野菜を調理し，地域の方々に振る舞っていた。
・大学の講義に参加し，学生に事業の紹介する機会がなくなった。
・まん延防止等重点措置や緊急事態宣言期間中の活動を中止とした。

4　令和4年度の取組み（予定）

・若者の意見を取り入れ，地域貢献，社会貢献する活動を企画，運営する。
・畑で，うねづくり，種まき，苗植え，収穫，草取り等の活動を通して，様々な人々と交流する。
・「仙台・サイダー」を販売し，売上金を寄付する。「わたしのふるさとプロジェクト」で主催する，東日本大震災追悼行事「鎮魂の花火」の打ち上げ資金にしてもらう。
・子ども参画型社会創造支援事業「チャボ！」とジュニアリーダー若林区連絡会「田んぼっ区」と連携し，ビーチクリーンやデイキャンプ等の合同研修を実施する。
・「荒町元気広場」を活用し，（仮）「大学生が考える，児童会祭りin元気広場」を企画，運営する。

5　これまでの経緯（成果）

【成果】
・畑での活動を通して，畑サポートの地域住民や小中学生ボランティア「チャボ！」のメンバーとの異年齢間交流により，楽しく活動することができた。自分たちで育て，収穫した野菜を子ども食堂に譲渡することで，達成感や充実感を得ることができた。
・小中学生ボランティア「チャボ！」・中高生ボランティアのジュニアリーダーと合同でビーチクリーンや植樹活動など，自分たちにできる地域貢献を行い，充実感や達成感を味わった。沿岸部での活動を通して震災について学ぶことができた。また，合同で研修を行うことで，各年齢段階にあった事業があることを紹介する機会となった。
・サイダー販売を通して，六郷東部地区の交流やにぎわい再生を目指す「わたしのふるさとプロジェクト」を応援しようという気持ちがさらに強くなった。
・若林区で活躍する方々に出会い，話を聞くことで，その人たちの生き方や温かさ，地域への思いなど，たくさんのことを学んだ。「自分もこんな大人になりたい」「これからも地域が明るくなるようなことを行いたい」「誰かの役に立てることがあるのなら行動したい」など，体験を通して「気付き」や「学び」を得て，そこから実際の地域貢献活動につなげることができた。

6　課題・改善点（評価）

【課題】
・外での活動は，天候に大きく左右される。
・新型コロナウイルス感染拡大防止のため事業を数回中止とした。
・学生は学業やアルバイト等で忙しく，参加人数が著しく少ない時もあった。
・収穫した野菜を調理して，地域の方へ振る舞うなどの，飲食をともなう活動ができなかった。
・若林区の交通の不便性から，活動場所までの移動が困難であった。

7　今後の展開・方向性

様々な出会いと活動から，たくさんのことを学び，そこから自分たちにできる地域貢献は何かじっくり考えていた。
また，若林区の沿岸地域に足を運ぶことで，震災復興について改めて考える機会となった。さらに，若林区で活躍する大人の話を聞くことで，将来自分が地域や社会で活躍できる大人になりたいという思いが強くなった。
これまでの取組を大切にしながら，新しい発想も取り入れていきたい。話し合いの中で，国連で掲げている持続可能な開発目標の「SDGｓ」にふれた意見があった。今後も参加する若者たちの「気付き」や「学び」を大切にし，自分たちが考える地域貢献，社会貢献活動につなげていきたい。

市民センター事業説明書(若者社会参画型学習推進事業)

事　業　名	担　当
まいぷろ（Miyagino Young PROgram）	宮城野区中央市民センター（区拠点館）

1　事業の目標（ねらい）

宮城野区の「沿岸部」や「仙台駅東エリア」等、区内にある地域の魅力を取材し、web記事または動画の制作・発表を通じて、①様々な人々と協働し、身近な地域をより良くすることへの関心を高める。②社会・地域の一員として、自発的・主体的に行動できる人づくりを行う。

2　事業内容（手法）

・高校生や大学生１５名程度募集。事業へ参加することへの思いを共有し、宮城野区内の地域の魅力を探る。
・学生自身のコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力など、社会人として必要なスキルを磨く。
・専門家と連携し取材や記事の作成の仕方を研修として学ぶ。
・メンバーが取材したい取材先やテーマを考えて決め、取材活動を行う。
・講師の指導をいただきながら記事を推敲し、web記事や動画などで情報発信していく。
・成果を発信できる成果物として、活動をまとめたリーフレット等の製作も視野に進めていく。
・地域貢献のために、“今、自分ができること”を意識し、考え、実行できるよう支援していく。

3　令和4年度の取組み（予定）

（※別紙年間活動計画あり）

４～５月　尚絅学院高校、宮城野高校で広報を行い、参加者を募る。
　・今年度の登録は１4名（尚絅学院高校11名、宮城野高校３名）。
　　事業へ参加することへのそれぞれの思いを共有してから、関係づくりを行い、活動を開始する。

７月　取材の専門家を講師に迎え、取材のノウハウを学ぶ。
　・メンバーそれぞれが取材したい取材先やテーマを決め、グループで取材を行う。（以下、取材先と日程）
　　①夏まつり「すずめ踊り」…7月31（日）
　　②アンパンマンミュージアム…9月29日（木）
　　③おすすめフード…10月9日（日）
　　④歴史民俗資料館…10月9日（日）
　　⑤子育て支援「いわきり子育てネットワーク」…10月15日（土）

１２月　発表会を実施し、講師からアドバイスをいただく。

１月　　成果報告会での報告に加え、TOHOKO360などのニュースサイトにて、Web記事や動画を掲載する。

4　これまでの経緯（成果）

・参加者の広報を広げたことで、尚絅学院高校に加え、宮城野高校からも３名の参加があった。（全１４名）
・事業運営については、参加者同士が安心できる関係づくりを行い、参加者の主体性や思いを大切にしながら進めてきた。
・事業のゴールを確認したことで、参加者から取材の基本について学びたいとニーズがあり研修を実施した。取材の基本を専門家から学び、取材に向けて準備を進めてきた。
・仙台市市民活動サポートセンターから情報提供やサポートをいただき、年を経るごとに協力体制を深められている。

5　課題・改善点（評価）

・今後の課題は、新規参加者の確保や既存参加者の継続、学生につける力の明確化（事業評価）、地域との関わり、事業後のフォローアップである。事業に参加したことが、将来の進路決定に有効に働くような仕掛けづくりが必要であると考えている。

6　今後の展開・方向性

・大学や高校との連携を広げ、活動の幅を広めていく。
・令和５年以降、宮城野区沿岸部の賑わい創出の一役を担えるような事業へと進化させていきたい。
・参加者自身が自ら学びを進めていくための、参加者自身のネットワーク構築を行う。
・地域のまちづくりに積極的かつ継続的に関わっていくために、ＮＰＯや地域団体との連携強化を図っていく。
・地域メディアとして区内ならびに市内で知られる存在となる。

市民センター事業説明書(住民参画・問題解決型学習推進事業)

事　業　名	担　当
中野ふるさと学校	高砂市民センター

1　事業の目標（ねらい）

①中野・蒲生地区の旧住民と共に、震災によって失われた歴史や文化の継承と旧住民の地域の絆を大切にしながら、心の復興を目指す。
②地域の歴史の継承や新たな地域の魅力の発信と共に、人々の再開と出会いの場づくるとなる事業を開催し、心の復興と地域の活性化を目指す。

2　事業内容（手法）

（1）対象者　　地域住民
（2）登録者数　15名程度
（3）活動内容　毎月1回定例会を開催している。
市民センター講座「中野ふるさと学校」と市民団体「中野ふるさとYAMA学校」の共催事業として進めている。
【事業（講座）の主な内容】
①事業開催に向けた企画会議（月1回程度）
②ふるさと交流事業「ダーツ交流会」
③「公開授業」の開催
④語り部活動
⑤日和山周辺　海辺の環境保全活動
⑥仙台蒲生日和山　山開き登山プロジェクト
（4）広報　・活動紹介チラシの制作と配布
・令和3年度仙台市市民センター成果報告会での成果発表（ポスター展示）
・高砂市民センターHPへの掲載

3　新型コロナウイルスによる影響

日和山山開き登山は、例年7月の第1日曜日に開催している。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和2、3年度は参加者を役員や関係者のみに限定して登山を実施した。

4　令和3年度の取組み(実績)

7月　仙台蒲生日和山　山開き登山
9月　ダーツ交流会【延期】
10月　日和山周辺　海辺の環境保全活動①
石巻津波伝承館への移動学習会
11月　ダーツ交流会
1月　公開授業「蒲生干潟　震災後の１０年」
2月　日和山周辺　海辺の環境保全活動②

5　これまでの経緯（成果）
本事業は、平成26年に高砂市民センターと宮城野区中央市民センターの共催事業（住民参画・問題解決型学習推進事業）として開始した。当初は被災した地域住民の心の復興を中心テーマに据え、地域住民の交流による地域の活性化を目指した取り組みを進めてきた。日和山登山やダーツ交流会などは、継続して実施されており、地域住民に広く認知されるようになった。 市民企画員が学びを通して活動していく中で、様々な分野への興味が広がり、企画員の意欲が高まっている。近年、干潟の環境保全に企画員の関心が集まっており、令和３年度は日和山周辺の清掃活動の実施につながった。
6　課題・改善点（評価）
これまでは、震災を乗り越えるために、地域住民の心の復興を目指して事業を展開してきた。震災から10年を経て、講座のテーマを「震災からの復興」から「未来につなげる地域交流」に移行しながら、創意工夫を凝らした事業運営を進めていく必要があると思われる。
7　今後の展開・方向性
8年目（令和4年度） ・蒲生干潟・日和山周辺の環境保全活動を企画し、活動への参加者を公募することで交流を深める。

市民センター事業説明書(住民参画・問題解決型学習推進事業)

事　業　名	担　当
かつら情報局	桂市民センター 泉区中央市民センター（区拠点館）

1　事業の目標（ねらい）

桂地区では現役世代の町内会役員の増加に伴い、広報担当者の負担増加や回覧板での情報伝達の遅滞、地域情報の更新の難しさ等、情報伝達に関する課題が現れている。また、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、地域住民が顔を合わせ交流する機会が減り、地域活動が停滞気味となっている。

【桂市民センター】

地域団体と連携しながら幅広い世代が地域活動に参加できる取り組みを行い、地域の活性化と地域貢献に関心の高い人材育成を図る。

【泉区中央市民センター】

桂市民センターと連携し、地域特性に応じた市民協働による地域づくりを推進する。

2　事業内容（手法）

【桂市民センター】

平成30年度から、企画委員会（令和3年度は10人）での話し合いと様々な講座の実施を通して、地域における人々や団体のつながりの促進に取り組んでいる。

・プログラミング講座

令和元年度、小学生親子・中学生を対象に開催した。地域の諸団体（桂連合町内会、桂小学校PTA、子ども会育成会、学校地域支援本部、地区社会福祉協議会）が企画運営を行い、地域在住の大学生、泉青年会議所メンバー、中学校教諭がサポーターとして参加した。

・「桂音頭」アーカイブ化、令和版制作

平成16年ころに作られた「桂音頭」を地域の宝として育み・伝えていく。令和2年度の企画委員を中心に令和3年3月、令和版桂音頭が制作されDVD化された。また、令和2年12月には企画委員のメンバーから任意団体「桂音頭を踊り隊」が結成された。

・町内会活動へのICT活用

令和2年度、各諸団体が情報化の課題を共有し、その解決に向け、令和3年3月、連合町内会役員会において、ICTプラットフォームサービス「結ネット」の導入を決定した。令和3年4月、連合町内会主体で情報発信システムによる町内会の「結ネット」を利用した「桂デジタルコミュニティ」の試行が始まった。

・LINE講座

令和3年11月、高齢者を対象に「ゼロから始めるLINE講座」を開催した。企画委員も講師の補助を務めた。

【泉区中央市民センター】

桂市民センター事業の支援、事業成果の情報発信を行うとともに、区内市民センター事業担当者に対し市民協働による地域づくりについて理解を深めるための説明会を開催している。

3　新型コロナウイルスによる影響

【桂市民センター】

令和3年度は、感染拡大防止のため、令和4年2月に予定していた「ゼロから始めるLINE講座　フォローアップ編」、令和4年2月~3月に予定していた「桂作品展示会」を中止した。

4　令和4年度の取組み（予定）
【桂市民センター】 引き続き、企画委員会、地域住民対象の講座（ＬＩＮＥ講座等）、地域からの情報収集と市民センターのロビーを活用し地域資源、地域行事，地域団体活動等の情報発信（ロビーでの作品展示会等）を行っていく。 【泉区中央市民センター】 引き続き、桂市民センター事業の支援、事業成果の情報発信、区内市民センターに対する説明会を開催する予定。
5　これまでの経緯（成果）
【桂市民センター】 桂音頭に関する一連の取り組みは、コロナ禍のもとで地域住民の連帯感と地域に対する愛着を育む機会となり、令和3年度、小学校運動会で３・4年生による「かつら音頭の踊り披露」など、地域住民の絆づくりの一助となった。また、企画会議や講座の実施を通して、参加者の地域活動への関心の高まりが見られ、地域住民同士の交流や地域諸団体間と小学校との連携の輪が広がった。 【泉区中央市民センター】 市民や市民センター職員に対し桂市民センター事業の成果や市民協働による地域づくりの意義を継続して伝えることができている。
6　課題・改善点（評価）
【桂市民センター】 LINE講座では「教えていただく方がたくさんいて聞きやすかった」「ゆっくりと進めてもらったので、わかりやすかった」等の意見が多く寄せられた一方、「一回ではなかなか理解できない」「復習をかねてもう一度受講したい」などの意見もあり、継続した学びの場の必要性が感じられる。また、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策を要する状況が続いており、市民センターにおいても施設利用の制限や講座等の縮小・中止等影響が生じる可能性がある。 【泉区中央市民センター】 コロナ禍のもとでの情報発信について、資料の分かりやすさや発信手法の多様化など、改善を重ねていく必要がある。
7　今後の展開・方向性
【桂市民センター】 市民センターでは、さらに多くの地域諸団体と連携し、LINE講座等情報ツールへの理解を深める講座の開催、「桂音頭」など本事業の成果を活用した地域諸団体の支援、市民センター利用団体の作品展示会等による地域活動の情報発信充実等、今後とも地域住民が安全安心に気軽に集い、幅広い交流が生まれるような事業展開を目指していきたい。 【泉区中央市民センター】 区拠点館として、桂市民センターが行う事業について今後も連携しながら、同館の取り組みを他の市民センター職員に対する紹介事例として活用する等、住民参画・問題解決型学習推進事業の趣旨を踏まえた市民センター事業の推進に努める。

市民センター事業説明書(住民参画・問題解決型学習推進事業)

事　業　名	担　当
市民企画会議 **かむりの里いきいきプロジェクト**	根白石市民センター 泉区中央市民センター（区拠点館）

1　事業の目標（ねらい）

泉西部地区は、歴史と伝統、自然や食文化等あらゆる魅力に恵まれた地域であるが、都市化と高齢化の進行により、それらを次の世代に残し伝えることが困難になりつつある。また、地域を牽引してきた人々の高齢化も顕著であり、若い世代の活躍と継承、地域の世代交代が期待されている。

【根白石市民センター】

若い世代の企画員を選定し、地域の現状や未来について若い感性で話し合う場を提供するとともに、無理なく参加でき、地域内で活躍できるよう事業を企画立案する。

【泉区中央市民センター】

根白石市民センターと連携し、地域特性に応じた市民協働による地域づくりを推進する。

2　事業内容（手法）

【根白石市民センター】

市民センターが橋渡しとなり、地域の伝統や振興の中核を長らく担ってきた住民を企画会議のスーパーバイザーに迎える等し、若い世代が安心して地域を担う人と人とのつながりを育み、積極的な地域活動とスムーズな世代交代につなげることを目指す。（平成29年度から開始。令和4年度の企画員は地域住民16人が登録し12人前後で運営、うち新規参加者4人）

地域課題やニーズ共有のための話し合い、地域活性化を目指した事業の企画会議

企画会議で決定した事業の実施に向けた会議

【泉区中央市民センター】

根白石市民センター事業の支援

企画会議への参加、事業成果の情報発信、区内市民センター事業担当者に対する説明会等

3　新型コロナウイルスによる影響

【根白石市民センター】

令和3年度は8月20日から9月12日まで、まん延防止重点措置が発令され、9月中の市民センター講座等をすべて中止とし、市民企画「お寺でヨガ・坐禅」も10月に延期とした。そこで、企画会議を重ね感染対策をより厳格化し、徹底した対策を講じることで10月に実施することができた。

4　令和4年度の取組み（予定）

【根白石市民センター】

昨年実施したお寺シリーズ第2弾として「お寺で禅クラフト」を開催し、地域資源について学び、地域の竹を使い竹クラフトを行う。また、今まで市民センターが主体となって開催された「凧揚げフェスタ」は、令和4年度に地域団体が主体となって運営できる体制を構築する。

【泉区中央市民センター】

引き続き、根白石市民センター事業の支援、事業成果の情報発信、区内市民センターに対する説明会を開催する。

5　これまでの経緯（成果）

【根白石市民センター】

令和２年

・企画員の世代若返りへの取り組み。各種団体への聞き取り調査・事業趣旨の整理等事前準備を行った上で個別に声がけを行った結果、20～40代の地域住民6人が企画員として参加。事業開始時には館長のプレゼンによるキックオフミーティングも行った。

・新たな取り組みとして「根白石村民歌」を復活させた動画の発表会を実施した。動画の作成やYouTube への掲載を通して若い世代が活躍し、地域の歴史を振り返る機会となった。

・もう一つの企画の「凧揚げフェスタ」は、学校・ＰＴＡ・育成会等多くの地域団体からなる「凧揚げフェスタ実行委員会」と協働して実施した。伝統文化の継承と世代間交流につながった。

・各事業を通して、企画員同士の交流が進み、地域について考える若い世代のコミュニティが広がっている。

令和３年

・若い世代の企画員が話し合いを重ね、令和3年度の新たな取り組みとして、地域資源を活かした事業「お寺でヨガ･坐禅」を企画した。企画員のみによる運営を前提に実施したこの事業が参加者から好評を得られたことで、地域の魅力発信とともに企画員の成功体験となり、企画員たちの連帯感をさらに深めることができた。

・「凧揚げフェスタ」は、学校・ＰＴＡ・育成会等多くの地域団体からなる「凧揚げフェスタ実行委員会」と協働し、世代間交流が図られた。

・市民センターホームページのみならず企画員自らがインスタグラムやフェイスブックでイベント内容を拡散するなど、幅広い情報の共有、発信を行うことができた。

・ 各事業を通して企画員と地域住民との交流が進み、新たな企画員が加わるなど、地域における若い世代のコミュニティ活動が活性化している。

【泉区中央市民センター】

市民や市民センター職員に対し、事業の成果や市民協働による地域づくりの意義を継続して伝えている。

6　課題・改善点（評価）

【根白石市民センター】

市民参画型事業の目的である「市民が自ら学ぶことで主体的な活動が地域で多様に展開できる」の理解浸透は達成できている。今後は自らの団体が町内会・観光協会・商店会などと連携を取りながら企画運営を進めていけるよう横の連携強化が課題となる。

令和４年度になり新たな企画員が参加したが、どのように発展させてきたのか等の情報を共有していく必要がある。

【泉区中央市民センター】

市民センターの事業から始まり、参加者たちが任意団体を立ち上げ、自主的に活動していく好事例として、区内だけでなく市内外に積極的に発信していく必要がある。

7　今後の展開・方向性

【根白石市民センター】

今年度（令和4年度）で、複数年事業最終年となる。今の企画員たちで任意団体の立ち上げを行い今後は自主的な活動を行っていくが、市民センターとしても可能な限りサポートを継続して行っていく。また、来年度からは新たな事業の立ち上げに向けて、地域課題の把握や企画員の選定などの準備を進めていく。

【泉区中央市民センター】

区拠点館として、根白石市民センターが行う事業について今後も連携しながら、同館の取り組みを他の市民センター職員に対する紹介事例として活用する等、住民参画・問題解決型学習推進事業の趣旨を踏まえた市民センター事業の推進に努める。

市民センター事業説明書(子ども参画型社会創造支援事業)

事　業　名	担　当
ぼくらの長町黄援隊！	太白区中央市民センター(区拠点館)

1　事業の目標（ねらい）

①地域への愛着・関心の高揚を図る。
②地域づくり・ボランティア活動の体験機会を創出する。
③参加児童同士の交流や地域を構成する団体や人々との交流を深める。
④参加児童の成長と地域のために貢献できる人材の育成を図る。

2　事業内容（手法）

（1）対象者　　小学校4年生～6年生
（2）登録者数　15名（内訳：小４・3名　小５・4名　小６・8名）
（3）募集方法　6月に長町エリアの小学校（長町小，長町南小，東長町小，大野田小，富沢小，八本松小）の4～６年生を対象に，事業への参加募集チラシを配布
（4）活動内容　令和3年度の7月から活動が始まり、年間を通して月に１回程度活動を実施（全8回）
基本的な枠組みは太白区中央市民センターで定めつつ、活動内容は、参加児童の意見を伺いながら、仙台８９ERSスタッフと太白区中央市民センター職員とで協議、決定する。

【当初活動計画のイメージ】
①オリエンテーション
②仙台８９ERSと長町を応援するポスターや新聞の制作・掲示・配布
③仙台８９ERS関係者や長町商店街の方々との交流
④「ぼくらの長町黄援隊！」の活動紹介
⑤仙台８９ERSホームゲームでのボランティアスタッフ活動
⑥活動のまとめ

（5）広報　・活動紹介チラシの制作と配布
・令和3年度仙台市市民センター成果報告会での成果発表
・太白区中央市民センターHP（太中調査団）への掲載

3　新型コロナウイルスによる影響

令和3年8月に選手を取材して、新聞にまとめて参加校へ配布したり、仙台８９ERSの応援ポスターを長町町内会に配布したりして事業の活動報告をする予定だったができなかった。また、仙台８９ERSホームゲーム戦での活動計画を立てる時間も確保することがあまりできなかった。
※代替活動として、8月に仙台８９ERSの提案によりプロ選手とのオンライン交流会を開催するなど、参加児童のモチベーションが落ちることのないように工夫した。

4　令和3年度の取組み(実績・予定)

7月　活動①（はじめの会・仙台８９ERSと長町を応援するポスター制作）
8月　活動②（選手とのオンライン交流会・選手への手紙作成、送付）
9月　活動③（参加校への活動成果報告チラシの配布・長町商店街へのポスター掲示）
11月　活動④（応援フラッグのデザイン作成）
活動⑤（仙台８９ERSホームゲーム戦での応援フラッグによる寄せ書き活動）
12月　活動⑥（仙台８９ERSホームゲーム戦でのスタッフ体験活動）
2月　活動⑦（仙台８９ERSホームゲーム戦でのハーフタイム演出，エスコートスタッフ体験）
活動⑧（おわりの会・活動の振り返り）

5　これまでの経緯（成果）
平成23年からの第1期は、「食を活かした仲間づくり」をテーマに、食を通して様々な方々とのつながりを創出するというものであった。第2期となる平成26年度からは、各地区の市民センターと共催でエフエムたいはくキッズ情報局として実施するに至った。平成28年度から当該事業の地区館への事業移管に取り組んだことにより、新たな子ども事業として「見つける！伝える！ヒロセ川」広瀬川事業を企画・実施した。しかし、参加児童が少なく、事業の発展性が見込めないことから、新たな事業を検討するに至り、子どもが興味・関心を持ち主体的、継続的な地域づくり活動への参画が期待できる子どもたちによる地域振興に取り組むこととなった。
6　課題・改善点（評価）
新型コロナの影響もあり、地域の人々や団体との交流や地域を意識した活動が十分に実施できていなかったため、参加した子ども達が地域の課題を自ら見つけ、行動するまでには至らなかった。今後は、仙台８９ERSと連携しながら長町エリアで子どもたちが地域に貢献できることをさらに考えていく必要がある。また、継続した事業にすることで、今年度の実績を活かした活動を展開していくことも検討していきたい。
7　今後の展開・方向性
2年目（令和4年度） ・仙台８９ERSとの継続的な関係づくり ・参加児童の拡大の模索 ・仙台８９ERSと協働して地域に根差した課題を探るテーマや計画を設定する。そして、当該テーマをもとに、子どもたち自身が行動できる活動内容を検討し、実践する。 ・活動内容を発信する方法（新聞や掲示、SNSの活用）を検討し、その効果を検証できる方法を検討していく。

市民センター事業説明書(子ども参画型社会創造支援事業)

事　業　名	担　当
中山キッズ	中山市民センター 青葉区中央市民センター（区拠点館）

1　事業の目標（ねらい）

中山市民センター管内には、中山小学校や川平小学校、中山中学校、仙台青陵中等教育学校など多くの教育機関が所在しており、この地域の特色を生かし、これらの機関と連携を図りながら事業を進めていくことで、地域住民と児童生徒が交流し、地域全体で子供たちの健やかな育ちを支えていくことにつなげていくもの。

地域の小学生を対象に、仙台青陵中等教育学校と企画した学校では経験することが難しい体験の場を提供することで、豊かな知識と健やかな育ちを支える一助とするとともに、地域に関心を持ち、地域を支える次世代の人材育成を目指す。

2　事業内容（手法）

令和３年度までそれぞれ実施していた中山市民センターの「中山キッズ」、青葉区中央市民センターの子ども参画型社会創造支援事業「青陵インパクト」を融合・発展させた事業として令和４年度より実施している。

【中山市民センター】

仙台青陵中等教育学校の生徒が企画員となり、地域の小学生を対象とした講座を企画・運営する。（今年度の企画員は中学生11名、高校生5名の計16名）

仙台青陵中等教育学校にて、平日の放課後の時間（16：15～17：30）に月1回の定例会を実施し、地域課題についての話合いから講座の企画や準備、当日の運営までを担っている。

【青葉区中央市民センター】

中山市民センター事業の支援、事業成果の情報発信を行うとともに、区内市民センター事業担当者に対し、子ども事業における地域づくりについての理解を深めるための情報提供も行っている。

3　新型コロナウイルスによる影響

感染の拡大状況をみながら、広い会場（学校の食堂）の確保や参加人数の制限、個々で作業が進められるような運営の工夫などを行いながら事業を実施している。

4　令和4年度の取組み（予定）

月１回の定例会を継続的に行いながら、以下のイベントの実施に向け準備を進めてきた。

[10月8日] 小学校高学年対象「キンボールで遊ぼう」

[10月9日] 小学校低学年対象「ペーパーアートを楽しもう」

[11月3日] 青葉区民まつり(ブース出展)「金魚（プラ板で作成）つり、ボーリング、工作体験」

5　これまでの経緯（成果）

【中山市民センター】

平成30年度から「中山キッズ～君はチャレンジャー」の講座を実施。

[H30] 美術館たんけんたい、ベガ号による星空観察、工作、調理実習

[R元] 虫の声を楽しむ会、ベガ号による星空観察、創作だるま作り

[R2] JLと遊ぼう、「オーロラ・日食・星空の旅」（講話）、オイルパステルを使ったクリニカルアート体験

[R3] 「中山キッズin青陵インパクト」を開催

「青陵インパクト」と共催し、「中山キッズ」の企画・運営を青陵インパクトのメンバーが行う連携を実施（全2回実施）。中山小学校・川平小学校に参加募集のチラシを配付し計12組の親子が参加した。1回目は小学校低学年親子を対象の「楽器作り」、2回目は小学校高学年を対象の「スライムの実験」を実施した。

【青葉区中央市民センター】

平成30年度から子ども参画型社会創造支援事業「青陵インパクト」を実施。

仙台青陵中等教育学校の生徒が、「地域社会の一員として自分たちに何ができるか」という社会参画のあり方を考えるきっかけになるツールとして作製した小学生向けのカードゲームを体験することを通して、地域活動に関心を持つ小学生を増やすことを目指して実施。

令和3年度は、新型コロナ感染症拡大の影響でカードゲームを使った活動の展開が困難となったため、インパクトメンバーと話合い、「自分たちが地域のためにできること」をテーマに、地域の小学生を対象としたイベントの企画・運営に挑戦することとし、中山市民センターと共催した「中山キッズin青陵インパクト」を実施した。

6　課題・改善点（評価）

現在は、仙台青陵中等教育学校の生徒のみに企画員としての参加を呼び掛けているが、中山市民センターの管内には青陵中等教育学校の他にも小中学校があり、さらに事業の輪を広め、より多くの児童生徒が「中山キッズ」に参加し、幅広い交流が生まれる機会を創出していけるよう、働きかけを継続していく必要があると捉えている。

7　今後の展開・方向性

【中山市民センター】

企画員を仙台青陵中等教育学校だけではなく、中山地域に住む中高生へと広げていくことで、より地域に関心をもつ子どもたちの育成につながると考える。また、市民センター利用団体や地域住民への情報発信の充実等、地域全体で子どもを育てていく取組、幅広い交流が生まれるような事業展開を目指す。

【青葉区中央市民センター】

区拠点館として、中山市民センターが行う事業について今後も連携しながら、同館の取り組みを他の市民センター職員に対する紹介事例として活用する等、事業手法の他地域への水平展開も図りながら市民センター事業の推進に努めていく。

仙台市公民館運営審議会委員名簿

（任期：令和３年11月１日から令和５年10月31日まで）

	氏　名	職業または所属団体
1	相澤（あいざわ）　雅子（まさこ）	仙台市立南小泉中学校学校支援地域本部 スーパーバイザー
2	安藤（あんどう）　歩美（あゆみ）	ＴＯＨＯＫＵ３６０代表・編集長 （令和４年３月31日まで）
3	市瀬（いちのせ）　智紀（ともので）	宮城教育大学教育学部　教授
4	伊藤（いとう）　美由紀（みゆき）	東北工業大学ライフデザイン学部　准教授
5	大内（おおうち）　幸子（ゆきこ）	せんだい女性防災リーダーネットワーク　代表
6	幾世橋（きよはし）　広子（ひろこ）	仙台市社会学級研究会　顧問
7	熊谷（くまがい）　敬子（けいこ）	仙台市立岡田小学校　校長
8	佐藤（さとう）　正実（まさみ）	有限会社イーピー風の時編集部　代表取締役
9	菅原（すがわら）　正和（まさかず）	仙台市議会　議員
10	鈴木（すずき）　京子（きょうこ）	公募委員
11	福士（ふくし）　定男（さだお）	仙台市連合町内会長会　庶務理事
12	牧（まき）　靖子（やすこ）	マイスクール川平　コーディネーター
13	松田（まつだ）　道雄（みちお）	尚絅学院大学人文社会学類　教授
14	三浦（みうら）　和美（かずみ）	東北福祉大学教育学部　教授

50音順・敬称略

仙台市公民館運営審議会　審議経過

開催日	協議内容
令和３年11月11日	○委嘱状交付 ○会長、副会長の選出について ○諮問 ○会議の運営、日程について
令和４年３月15日	○今後の日程について ○住民参画型学習事業の概要について ○子ども参画型社会創造支援事業について ・事業の成果と課題について ・事例：ぼくらの長町黄援隊！（太白区中央市民センター）
令和４年５月19日	○住民参画・問題解決型学習推進事業について ・事業の成果と課題について ・事例1：中野ふるさと学校（高砂市民センター） ・事例2：かつら情報局（桂市民センター）
令和４年７月７日	○若者社会参画型学習推進事業について ・事業の成果と課題について ・事例 1：「若者によるまちづくり実践塾」（青葉区中央市民センター） ・事例 2：「仙白圏プロジェクト・人」（若林区中央市民センター）
令和４年９月18日	○現地視察 住民参画・問題解決型学習推進事業 「市民企画会議　かむりの里いきいきプロジェクト」 会場：見松寺（泉区西田中字朴ノ木山4）
令和４年10月９日	○現地視察 子ども参画型社会創造支援事業「中山キッズ」 会場：中山市民センター
令和４年10月22日	○現地視察 若者社会参画型学習推進事業 「まいぷろ（Miyagino Young PROgram）」 会場：宮城野区中央市民センター
令和４年11月10日	○住民参画型学習事業の視察について（報告） ○今後の進め方について
令和５年１月26日	○諮問「住民参画型学習事業の成果の確認と今後の展開について」に係る答申作成について
令和５年３月16日	○諮問「住民参画型学習事業の成果の確認と今後の展開について」に係る答申作成について

開催日	協議内容
令和５年５月18日	○諮問「住民参画型学習事業の成果の確認と今後の展開について」に係る答申作成について
令和５年７月６日	○諮問「住民参画型学習事業の成果の確認と今後の展開について」に係る答申作成について